
剣盗りモノガタリ

松下星哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣盗りモノガタリ

【Nコード】

N1121Y

【作者名】

松下星哉

【あらすじ】

とある国の一人の少年が様々な国を旅しながら妖魔やモンスター、剣の使い手等と闘い、色んな出会い、そして人として剣士として成長していく剣の物語。

バトル、ラブコメ要素ありな昔風の印象を与えつつ、実は未来の話。

第1話〜序章〜（前書き）

とりあえず、不慣れなので見づらいかもしれませんがご容赦下さい。

第1話〈序章〉

〈プロローグ〉

・・・その日、山向こうの夜空が煌めき、大気が震えた。
家の外では村人たちが何事かと、騒いでいた。今日は祭りで特に人出が多い。

「何だ、何だ今の音は」

「一瞬光ったぞ」

「何もこんな目出度い日に・・・」

俺、トウヤ・ヒノカは家の外から聞こえてくるそんな話し声を聞きながら、そっとため息を吐き、目の前の人物へ話しかけた。

「親父、外が何やら騒がしいが様子を見に行かなくていいのか？」

おれが自分の父親である目の前の人物、タチオ・ヒノカにそう言ったのには二つ理由がある。

一つは、俺の親父はこの村で村長に次ぎ二番目にお偉いさんだということ、もう一つは俺自身外に出たいということ。なのだが・・・
「心配は要らん。話し声を聞く限りでは、このあたりには被害もなさそうだし、余程大事になれば村長が出張ってくるだろう。それよりも今は儀式を終わらせるほうが先決だ。」

・・・これである。ちなみにこの儀式というのは、この村の古くからのしきたりで、15歳になると元服げんぷくを迎えた、つまり一人前の大人として認めるために、様々な儀式、説明等が行われる。

まあ、それに伴い色々な権利、例えば剣を持てるようになったり村

の外へ出れるようになったり、だとか。ようやく旅に出れるなあ・

「つまり、そのことを踏まえていれば、いざというときにも・・・トウヤツ！聞いているか！？」

「モ、モチロン」

聞いてませんでした。

「ふう。お前というやつは・・・まあ、いい。儀式は終わりだ。どうせお前のことだ、最後まで真面目に聞くとは思ってない。」

と親父殿は苦笑しながら、

「明日には旅立つんだろう？しばらく帰ってこんだろうから今日はせっかくの祭りだし楽しんでこい」

と話が分かることを言い出した。

「ああ、ありがとう親父。・・・父上。行ってきます。」

俺は立ち上がると、親父に一礼し、外へ飛び出した。

暦255年、7大陸から成る、とある国のとある村の一室より物語は始まる・・・話は12年程前に遡る。

へへ暦243年へ

空は澄み小鳥のさえずりが聞こえる、そんな爽やかな朝だった。そ

の空の下にある屋敷の庭先で・・・

「えいっ！やあっ！とうっ！」

朝の静寂を打ち破るように一人の少年がそんな気合いとともに木剣を振り回していた。軽くよろけながら。

「トウヤ、剣は力任せに降ってもダメだぞ。それに剣に振り回されすぎてるな」

と、たしなめる声が少年の傍から聞こえた。

それは、黒髪を短髪に揃え身の丈180？へ僅かに届かない筋肉隆々な青年だったが、その少年を見守る黒い瞳の眼差しはとても温かなものだった。

「むう。でも、このけんがおもたくてむずかしいよ、とうちゃん」

と、トウヤと呼ばれたこれも黒髪黒瞳の少年は口を尖らせて抗議する。

「はは、そうだな。トウヤの身体より剣のほうが大きいもんな。ただ剣を振るうのは力任せじゃ駄目なんだ。ちょっと貸してみろ。」と、父ちゃんと呼ばれた青年タチオはトウヤと呼ばれた少年より剣を受けとる。そして、論すような口調で、

「いいか、トウヤ。人には体内に流れるオーラってものがある。それを上手く操ることで力も速さも何倍にもすることができるとだ。」

と、タチオは木剣を受けとると同時に全身にオーラを纏いだした。

淡く身体が光りだし、剣先まで光りだした。

「よく見ておけ。これがオーラだ。このように自分の身体から手に

持った武器にまでオーラを行き渡らせることで破壊力や反応速度が数倍から数十倍に跳ねあがる」

と、おもむろに目の前にある大岩へ剣を振りかぶる。

ドゴン！

そんな音がし目の前の大岩が真つ二つに割れる。

「このようにオーラを纏った武器で斬ると木剣といえどかなりの破壊力になる」と説明する。

「まあ、いきなりやれといっても無理だろうから徐々に覚えていけばいいさ。まあ今日はここまでにしとこう。汗を拭いとけよ。」

そういつてタチオはトウヤの頭を軽く撫でて、家のほうへ踵を返した。

「おーら・・・？」

三歳の少年には言葉のみの説明が難しいと判断したのかは分からないが、実際みてもよく分からないといった風情の少年がそこに立ち尽くしていた。

第1話〜序章〜（後書き）

ご意見、ご感想あればよろしくお願い致します。

第2話く旅立ちく（前書き）

大筋みたいなものを書いてないので内容がわかりづらいかもしれません。

また、文章の拙さはご容赦下さい。

第2話く旅立ちく

〈暦255年〉

いざ、出発しようとして家の庭先で佇んでいたら、ふと修行を始めた頃の記憶が頭を掠めた。

「そういや、あの頃はまだ自分の本当の能力も知らなかったな」
軽く独りごちてみる。

「まあ、右も左もわからんようなガキだったからな。しょうがないか」

その時後ろのほう、つまり家の玄関から大きな声がした。

「トウヤー！元気でやれよー！魔物に気をつけてなー！」

親父も心配性だな

「分かってるってー、父さん！それじゃあ、行ってきまーす！」
俺も後ろを向き右手を挙げて大声で返す。

「さてと、行きますか」

こうして俺は生まれ育った村を出た。この先起こるであろう様々な出来事に胸を躍らせながら。

（村の外）

そして今、感覚的に村を出て30分ぐらいもした頃だろうか、俺は何と言うか困惑していた。

というのも、

「聞ってるの？ トウヤ？ まずはこっちの海沿いよりも山道を通ったほうが隣の村にずっと近いのよ？」

と、話しかける奴が居るからだ。

「いや、だからな、俺が聞きたいのは隣の村への近道じゃなくて、何故お前が村を出て此处に居るかということなんだが・・・ネク」
するとそいつは何故か微かに目をそらしながら、

「だ、だから私も母様からちゃんと許可を取って村を出てきたって言ってるじゃない！」

と軽くキレながら言ってきた。

たしかにこいつ（ネク・カナワ♀）の母ちゃん（アオイ・カナワ♀）の大らかな性格なら、例え女の独り旅でも、大して気にせず旅の許可をくれそうだが・・・ちなみにこのネクは、俺のお隣さん家の一人娘で、俺にとって所謂幼なじみってやつだ。しかも誕生日が二月ばかり俺より早い。そのせいかやたらと年上ぶってきやがるのがアレだが・・・はぁ・・・そんなことよりも、

「いや、俺が言いたいのは何で俺が村を出た後にお前が後ろから追ってくるようなタイミングで現れたってことなんだが。お前ももう少し早く村を出ることができた筈だろう？」

と俺が言うと、こいつは言い訳がましく、

「い、いや私も自分の誕生日に村を出ようとしたのよ？ ただ、色々と都合が合わなかったっていうか、気がのらなかったっていうか、・

・・独りじゃ不安だったっていうか・・な、なによ！こんな美少女と一緒に旅ができるっていうのに何が不満なわけ！？」
と逆ギレしてきた。

不満っていうか、まあ確かにこいつの見てくれは身長155？程度で小柄だけど、腰まで伸ばした絹みたいなサラサラの黒髪に異常なぐらい白くて綺麗な肌、2年ぐらい前から急に大きくなりだした胸にも関わらずやたらと細い腰、猫みたいな大きな黒い瞳と整った形の鼻や口、と傍から見たら間違いなく美少女の部類には入るんだろうが、いや入るのか？

まあ、人口500人程度の村では同年代の子供は居らずいまいち基準がよく分からんが、そこは大して問題じゃない。

俺の自由気ままな独り旅計画が・・・

撒くか？いや、それでもしこいつが魔物や山賊とかに襲われたらさすがに寝覚めが悪いな。

はあ・・・

まあ、とりあえず隣の村までは一緒に行ってそれから考えてみるか。規模が俺の村よりも5倍はあるって話だしな。

「分かった、分かった。一緒に行こうぜ。とりあえず隣の村まで。口入屋で仕事も探す必要があるだろうし、宿屋も探す必要」

そこまで言って、異常な気配と聞いたことがない声が後ろから聞こえた。

振り替えるとそこには、顔が魚っぽく、体つきは人っぽい何かが立っていた。

第2話く旅立ちく（後書き）

ご意見、ご感想、等あればよろしくお願い致します。

第3話く遭遇く(前書き)

いまいち行の間隔がつかめないので、読みづらいかもしれませんが
ご容赦ください。

第3話〈遭遇〉

そいつは今まで見たこともないような姿をしていた。魚のような顔（といっても大きさは人の顔ぐらいあるが）、大人と同じぐらいの背丈（165〜170？程度）、手足に生えた鱗と青っぽいというか、緑っぽいというか何とも表現し難いぬめっとした皮膚、明らかに人間ではなかった。

ネクが

「は、半魚人？」

と言う。

「半魚人？あれって魔物の部類に入るのか？確かに異形じゃあるが・
・・」

そもそも、今の世でいうところの魔物の定義とは、

『人語を解さず人間へ害意を持つ異形の生物』とされている。つまり、こちらの言葉が通じずしかもこちらへ攻撃してきたり食料にしてこようとする生物が魔物というわけだ。

だから、ものは試しだと俺はそいつに話しかけてみる

「あー、えっとその奴、俺達に何か用か？」

と、俺が言うとその半魚人？らしき生物は目を大きく見開いた。

「オマエ、俺を見て驚かないのかっ!？」

何か言葉が通じた。

「い、いや、確かに見た目は人間じゃないけど、別に襲いかかってくるわけでもないしな。それよりも今お前が喋ったことに驚いたが・・・」

俺がそう言うと、半魚人は

「オレはこう見えてオレの一族では天才と呼ばれている。一族の中には、人語を喋れない奴も居るぞ？むしろ喋れない奴のほうが多いな」

流暢に返してきた

「そうか、天才の一言で片付けるのもどうかとおもうが・・・別に俺達を食おうとしたり襲いかかってくるわけじゃないんだな」
俺がそういう言うとそいつは憤慨して、

「人間が人間以外の生物に対して偏見を持っていることは長の話や人間の書物などで知っているが、勝手に決め付けるな！そもそも俺達魚民は海藻や貝ぐらいしか食べない大人しい生物だ！」

「魚民っていうのか・・・まあ、お前の言いたいことは分かった。じゃあ、改めて聞くが俺達に何の用だ。まさか、ただ話しかけたかっただけか？」

そう言うとき魚民は、

「それもある。この道を人間が通ることは珍しいからな。」

と言った。

するとネクが、

「そうか、ここはもう村の結界外になるのね。だからか・・・漁師の人達は普段は村付近の結界内で働いてるからね。」

ちなみに結界とは、かつて250年以上前に歴が始まった当初、この『火の大陸』を制覇した時の王スサノオが各地域を統治しやすくするために、結界技能を持った者、当時妖術師と呼ばれた者をかき集めて、当時存在していた集落毎に施していったものである。その結界の範囲を基準に現在の各村が作られていった。正式な呼び名は人口100人以上の集落を村、人口1000人以上の集落を町、人口10000人以上の集落を街という。街規模になると、俺の村では見たこともないような珍しい物がある。何年か前に来た行商の持ってきた、あの甘い菓子・・・

「それで、本当に何の用なんだ？確かにもの珍しいとは思うが、この道に全然人が通らないというわけでもないだろう。なんでわざわざ俺達に？」

と俺が言うと魚民は、

「確かに、人間自体は何回か見たことはある。ただ俺の好奇心は並外れていてな、珍しい人間の番が見れて思わず興奮して近づいてしまった。俺達魚民は成人して時期がくれば、卵を産み出して子孫を残すが、オマエら人間は雄と雌が交尾して子孫を残すのだろうか？だから交尾が見れると思ってつい近づいたんだ」

といった。なるほど、つまりこの道は人が通ることもあるが俺達のように男と女が二人揃って通ったことはない。それが珍しくてつい近寄ったと。納得だな。

すると横の奴が

「な、な、何を言ってるのよあんたっ!? つ、つがいっ!? こ、こ、こ、こうびっ!? な、なんであたしとこいつが番でこ、こ、交尾しなくちゃいけないわけっ!? 交尾するにしても、こ、こっちだって、段階とか準備とかそれなりに雰囲気とか必要なんだからねっ!?!」

「うん、落ち着け。微妙に論点がずれてるぞ。あー、それと魚民?。俺達は別に番でもなんでもないぞ。ただの知り合いの男と女ってだけで、別にお前が期待することはなんにもないぞ。」

そう言うとき魚民は、

「そ、そうなのか。珍しいものが見れると思ったのだが・・・まあ、初めて人間と話せただけでもよしとしよう。」

と納得した感じだった。

「まあ、俺も珍しい奴と喋れてよかったよ。それと偏見は改めるわ。悪かったな。旅の途中だから、俺達はもう行くぞ。縁があったらまた会おうぜ。」

俺はそう言うとき手を振って魚民に別れを告げ、踵を返して歩き始めた。

「・・・ただの知り合い・・・そうよね、そんなものよね・・・」

横でネクが小声で何かボソツと言ったようだが、俺にはよく聞こえなかった。

第3話く遭遇く（後書き）

大まかな設定は纏まっているのですが、それを文章にするのが難しいです・・・

第4話く魔物く（前書き）

やたらと説明くさい話になりました・・・

第4話　魔物

俺の村は名前をカリユウ村といい、場所はこの火の大陸の最南端に位置する。

その名産品といえば、海に近いという地の利を活かして収穫の多い海産物が真っ先に挙げられる。

他の地域に行商に持って行く主な商品としては、一番近い村でも、大人の足で歩いて片道に最低3日は掛かるためやはり日持ちのする魚貝類の干物等が多くなるのは、まあしょうがない。

隣村は海から遠いためそれらは毎回完売するらしい。

他には、農作物やら織物やらが主力商品とは言わないまでも、安定した供給を行えるので、隣村には固定客がついているらしい。

そんな感じで物についてはそれなりに他の地域と上手く取引をしていると村の行商人達は言っていた。

物以外でカリユウ村の有名なモノと言えれば二つありその1つには剣術が挙げられる。

それは、ここ数年でじわじわと有名になってきたという話だがそれには理由がある。

この大陸の首都であるカグツチという街で年一回開催される格闘大会でのここ数年の優勝者が、カリユウ村出身のヒノカ流剣術の使い手だということだ。

まあ、知り合いの姉ちゃんだが。

何でも華奢な見た目とは裏腹に鬼神の如き動きで物凄く強いことから人目を引き出身地や流派が他の大会参加者や観客から注目されたらしい。

優勝後、街にある城への士官の話、旅の用心棒、町や村等の警備、ついでに縁談が相当数本人へ舞い込んだらしいが全て蹴って今は街

で悠々自適に暮らしているとその人のお母さんは言っていたが。まあ余談だが。

もう1つの有名なこととは現在より何百年も前から、

『世界の7大陸にはそれぞれの大陸に一本ずつ、神剣しんけんが刺さっておりそれが大地や生物を活性化させ、生活を豊かにしている。それを引き抜き手にした者は人であれ鳥であれ魚であれ神と等しき力を得るだろう』

という確信めいた、冗談のような、『7神剣物語』（ななしんけんものがたり）、という話が言い回しや言語が違うにしてもどの大陸にも似たような話が伝えられているらしく、その話を基に、火の大陸初代覇王であるスサノオが大陸統治後に火の大陸の神剣を追い求めたという話が残っている。

結局見つかったという話はなく（どの大陸でも）、近年に、とある探索方法が見つかるまでは、神剣探索についてはずいぶんと下火になっていたが、その新しい探索方法により、神剣らしき場所に大体的見当がついたということで、現在街では神剣探索隊が編成されているらしい。

その探索方法とは単純な話で、「神剣がある場所に近づくほど魔物が活性化するのではないか」

という説をとある学者が以前に打ち出したらしく大陸中の測量と魔物の分布図を作成するため旅を10年程度し、最近漸く完成しそれを見当した結果、大陸の南側の方が明らかに魔物の質、量が高いということが判明したのだった。

だから、大陸の南側に神剣が刺さっている可能性が高いのではないか？との説が広まっていき、最南端にあるカリユウ村に何かしら神剣と関係があるのでは？という話が広まっていき、カリユウ村が大陸で有名になったのはまあ、大会優勝者の話と合わせ、偶々そんな

時期が重なった、のだと思うことにしよう。
まあ、何故急にそんな事を思ったかといえば・・・

「トウヤ！なにボーっとしてんのよっ！右に回りこまれてるわよ！」

とネクが叫んでいた。

というのも昨日魚民と別れ海沿いの道を進んだあと、山道に入った俺達は今、魔狼の群れに囲まれていた。魔狼とは、見た目は狼のような、だが狼の体長を倍ぐらいにした（ざっと見て3mぐらいか）、全身真っ黒な毛に覆われた、自分達以外の生物は餌ぐらいにしか考えていない魔物の呼び名であり、並の人間が戦えば大人2人程度でやぐ一頭と渡り合えるといった程度の強さの生物である。そんなやつが俺達を取り囲んでいた・・・10頭ぐらい。

いや、待て。数がおかしくないか。聞いた話では確かにこの生物の習性は数頭群れて獲物を襲うということだが、明らかに多いよな。いくらこのへんが大陸の南とはいえ活性化しすぎじゃないか。そう思いつつ俺は右側に近づいてきた魔狼へ対して腰から抜いた剣を横に薙ぎ払い魔狼を胴から真っ二つきした。

「ギャウンッ！！」

そんな鳴き声と共にその魔狼は倒れた。

「グルルルッ」

「ウーッ」

「ガオン！ガオン！」

その様子を見た他のやつが俺達を遠巻きにしながら吠えてきた。
今にも飛びかかってきそうな体勢で。

「さすがにあれだけの数に同時に襲いかかれたら不味いな」
俺がそう言うとネクが、

「あんた何言ってるの！？あんたが有無を言わず切り捨てるから手持ちの食糧を蒔いてその隙に逃げようとしたあたしの作戦が台無しじゃない！」
と言ってきた。

「いや、そうは言うけどな？それは一頭二頭ぐらいなら何とか通じる作戦だろ？さすがにあの数には足りないと思うんだが・・・」
するとネクは

「じゃあ、どうするの！？行商の人が持つてる魔物避けもないし、逃げ切れそうにもないし、どうしようもないじゃない！？」
と焦った様子である。

「まあ、落ち着け。俺の強さは知ってるだろ？あの程度の数どうってことないさ。」

俺が言うとネクは、

「ま、まあトウヤが強いのは知ってるけど。あたしが言いたいののは剣でどうにかなる数？ってこと」

と言ってくる。

そこで俺は漸く合点した。こいつへは同じ剣術道場での剣技ぐらいしか見せたことがなかったっけ。

「違う。俺の本当の実力を見せてやるよ。・・・下がってろ」

俺はそう言うのと愛剣の炎斬^{えんざん}へと意識を集中させ始めた。すると・・・
「えっ？なにこれ、剣が光り始めた？」
ネクが言う。

「ああ、これが所謂オーラってやつだ。このオーラを利用することによって、剣と俺の体は何倍にも強化することができる。ただ昔見たけどニルナ姉もオーラを使ってたぞ？知らなかったか？」

そう言う俺はオーラを纏った炎斬をネクへ見せる。ちなみにニルナとは三歳上のネクの姉貴で、実は大会優勝者その人である。

「ニルが？確かに昔から強かったけど・・・」

と若干腑に落ちない顔をする。

「まあ、いいや。さて行くぞ、魔狼どもっ！」

そう言いながら俺は魔狼の群れに飛び込み斬りかかった。

ズバツ！ザシュツ！バキツ！

「グオーツ！」

「ギャン！ギャン！」

「クウーン・・・」

そんな鳴き声とともに魔狼は全頭地面に倒れ伏した。

「まあ、こんなもんだ。強いだろ？俺？」

俺がそう言うのとネクは、微妙に納得してなさそうな顔で、

「オーラって何かズルい・・・」
と結構心外なことを言っていた。
俺は軽く嘆息し旅を再開した。

いや、別にズルくはないだろ・・・

第4話く魔物く（後書き）

不快感がなければそれでいいです。ご意見ご感想あればお願いします。

第5話く温泉街く（前書き）

イメージ通り、には進まないものです・・・

第5話〈温泉街〉

魔狼の群れと遭遇後、もう二日ばかりかけて夕刻頃、漸く一番近い隣の町へとたどり着いた。

その町の入口にある門を見上げて、

「大きいな・・・」

俺がそう感嘆の声を洩らすと、

「大きいね・・・」

と、横のネクが似たようなことを言った。

「いや、カリユウ村にも似たような形の門はあったけど、大きさが違い過ぎるだろ？」

そう、カリユウ村の入口にも門があるが精々3mぐらいの高さしかなかったが、この村の門はどう見ても10mはありそうだった。

「いやー、流石に村の規模が違うだけあるね。あそこが守衛所かな？」

そう言ってネクが向かって右にある小さい建物を指す。

「だろうな。えーっと、知らない村に入るには、身分証明書が要るんだよな。どこに仕舞ったっけ。」

俺は手持ちの頭陀袋に手をつ込み身分証明書を探す

「あつた。よし行くぞ。」と言って、入町の手続きをするため守衛所らしき建物に向かった。

（イグナ町）

町へ入る手続きを終えた俺達は、町中に入り目的の場所を探した。我儘を言う横のやつのために。

「もーっ！宿屋は何処なの？イグナ名物の温泉宿屋はっ！！」

「おい、落ち着けよ。守衛所の人も言ってたろ？温泉街は町の外れにあるって。そう直ぐには着かねえよ。」

としようがなしに俺は宥める。

ここイグナは源泉が湧き出るとかで温泉が名物の地域である。湧き出る量も豊富なため、それを利用して何軒も温泉用の宿屋があるらしい。

それ目当てにこの町へやってくる人も多いらしく、宿屋も必然的に増えていき、それに伴い色んな商売、例えば料理屋、名産品店、飲み屋、賭博場、等々の建物も増えていったという話だ。まあ、町の外から来た人は、温泉に入った後は羽根を伸ばしたい気分になるのだろう。

また、地元の人も家でわざわざ薪や火を使って風呂を沸かすよりは経済的なのか、温泉には常に人が多いとのことだ。

「おっ！それっぽいところに来たんじゃないか？」

それから一時間弱も歩いたところで、雰囲気の変わった場所に出た。妙に熱気があるな。

「キタキタキターーッ」ネクがアホみたいに騒ぎだし、駆け出そうとした。

「待てっ！止まれっ！さっき聞いたお薦めの温泉宿屋を探すぞ！飯が安くて量が多く美味しい、チヒロ屋って宿屋を！」

俺は慌てて声をかける。

これだけは外せるか。

「ええー。ご飯はどっちでもいいよ。それよりも湯船が広くて、美容に効く温泉がある宿屋を探すほうが……うん、チヒロ屋を探そう！」

何故か俺のほうを見ながら焦ったネクがそう言い出した。

いや、別に腹が減って機嫌が悪いとかじゃないぞ。

本当は温泉はどっちでもよくて飯のためにここまで付き合ったのに、ふざけたことを言い出したネクを物凄い目付きで睨んだとかそんなことはないぞ。

「ああ、美味そうな匂いからして、多分あの正面にある大きめの建物だと思う。さっさと行こうぜ♪」

上機嫌になった俺はネクを促し、早足で先に行く。

「そ、そうね。早く行きましょう。」

（危ない、危ない。そういえばこいつはご飯の邪魔をすると物凄く機嫌が悪くなるんだった・・・それにしても匂いって・・・）
ネクはそう思った。

その時、右の料理屋らしき建物の扉が開き女の子が飛び出して来た。
「助けて！」

そう言いながら私の後ろに隠れた。
年の頃は私と同じか少し下ぐらいで、着物の上に白い前掛けをしていた。

続いてその扉から屈強そうな顔を赤くした男達が出てきた。3人ほど。

「おいおい姉ちゃんよ、逃げることねえだろ？ちょっとお酌してくれて言っただけじゃねえか」

真ん中の大柄な男が笑いながらそう言った。左右の二人も何が嬉しいのか笑っている。

「嘘です！無理矢理座らせて手とか、お、お尻とか触ってきました！」

その女の子が涙目になりながら私に訴えてきた。

「あれー？酒代にお姉ちゃんへのお触り代も含まれてるんじゃないの？」

右側の太った小柄な男が

嬉しそうに言う。

左側の痩せてひよろつとした男が、

「まあ、いいじゃねえか姉ちゃん。戻ってこいよ。呑もうぜ？」
と笑いながら言う。

「う、うちはお料理屋でそういったことは一切してません！」
と女の子が必死になって言う。

「うるせえっ！こっちは代金払ってんだ！さっさと戻って相手しやがれっ！」

と真ん中の男が怒鳴りだした。

私は煩わしいと思いながら「あのー、この子も困ってるみたいなんです、あんまり無茶なことを言わないほうがいいんじゃないでしょうか？」

と遠慮がちに言ってみる。

すると、男達が顔を見合わせて笑いながらこちらへ、「お姉ちゃん別嬪だな。いいぜ、店を出るから俺達に付き合えよ？宿屋で一緒に呑もうぜ。」

と真ん中の男が私に言ってきた。宿屋？

「それは嫌です。あなたたちの相手をしている暇はありません。大人しく中で呑めないなら勝手に宿屋でもどこへでも行って下さい」

というと、何が嬉しいのか、

「おー、気の強い姉ちゃんだこと。まあ、いいから、いいから。」

と言って、酒臭い息を撒き散らしながら私の腕を掴んできた。その時、

「おい、ネク！何やってんだ！早く行くぞ？」

結構先まで歩いていたらトウヤがこちらへ走って戻ってきて怪訝そうにした。

「誰だ？こいつら？」

トウヤが言うので、私は

「酔っぱらい」

簡潔に答えた。

「ふーん。おっさん、こいつは俺の連れなんでその手を離してもらえるか？」

と言うと、

「あーん？なんだてめえは？この姉ちゃんは俺達と一緒に呑むんだよ。すっこんでろ！」

と凄んでいた。だがトウヤは、

「いや、おっさん、聞こえなかったか？俺は手を離せって言っただが。それにそいつは今から俺と飯を食うんだよ。邪魔すんな！」
キレ気味に言った。

「こ、このガキィ！おいっ！このガキやっちまえ！」と後ろの二人

に言う。

「おいおい兄ちゃんよお。お前こそ人の楽しみを邪魔するとはどういうつもりだ？ ああん？」

「そうだぞ。そんな野暮なやつはこうだっ！」

とひよろっとした男がトウヤに殴りかかったが、トウヤはその腕をかわし、右拳を男の顔面に叩き込むと、もう一人の小柄な太ったほうのお腹を右足で蹴りとばした。

二人の男は悶絶した。一人は口から何か吐いていた。「ぐうう」
「ぼええっ！」

一連の動作はほぼ一瞬である。

そこに居る女の子と大柄な男はポカーンと呆けていた。

「て、てめえクソガキ！ なにしやがる！」

と私の腕を離すと、大柄な男はトウヤへ向きあった。

「いや、なになって？ 殴りかかってきたんで、殴って蹴っただけだが？」

トウヤがキレ気味に言う。男は青ざめた顔で、

「て、てめえツラ覚えたからな！ 覚えてろよ！」

と言いながら後ずさり、二人の男を引き摺るように逃げて行った。

するとトウヤが呆れたように、

「なんだ、あれ・・・まあいいや。ネク！ 早く行くぞ！ もう腹が減って腹が減って・・・」

と、踵を返して歩きます。

「わかったわよ。さあ行きましょ。」

と私が言うと、

「待って下さい！」

そんな声がかかった。

女の子は、

「あ、あの、ありがとうございました！おかげでたすかりました。」
と律儀に礼を言ってきた。

「いいの、いいの。偶々通りかかったただだから、気にしないで？」
と私が言うと、女の子は

「いいえ！そういう訳にはいきません！お礼をさせて下さい！あの
ー、もし良かったらご飯を食べて行かれませんか？もちろん代金は
結構です」

女の子が私にそう言うと、それが聞こえたのかトウヤが振り返った。
目を輝かせながら。

これは絶対食いついてるわよね・・・温泉でお肌ツルツル計画が・

・

まあ色々な話が聞けるか、と思い直し

「わかった、有り難くご馳走になるわ」

と、女の子へ笑いかけながら言った。

第5話く温泉街く（後書き）

ご意見ご感想などあれば、お願いします。

第6話く仕事く（前書き）

内容をぶっちゃけると説明の回です。

第6話〜仕事〜

目の前にどんどんお皿が積まれていく。

確かにうちの店の料理は地元の人にも観光客にも評判が良く、イグナ温泉街一の料理屋と言われることもある。でも、いくらなんでもこの量は・・・

そんなことを思いながら、給仕の女の子はボーっと目の前の状況を見ていた。

目の前には、

「うん！これは美味しいな♪イグナ地鶏だっけ？肉の歯応えも最高だし、甘辛い味付けも肉に合っててやたらと箸がすすむな！」

と、箸を休めることなく料理を片付けていく少年が居た。

「あ、あんた！少しは遠慮ってものをしなさいよ！もう何皿目なの、イグナ地鶏の丸焼き？ひー、ふー、みー、・・・もう10皿いってんじゃない！」

と連れの少女が叫んでいた。

「えー？もうそんなに食ったか？美味すぎてついっぴいおかわりしちまったよ。まあ、腹八分が健康にいいって話だし、このへんにしとくか！ごちそうさん！ありがとう、マーマー！」

と私、給仕の女の子ことマーマー・ナカヤに少年がお礼を言ってきた。

「い、いえ喜んでもらえて私も嬉しいです。それにしてもトウヤさ

ん、よく食べられるんですね？」

ちなみに私はイグナ地鶏の丸焼きは、一皿の三分の一ぐらいでお腹がはち切れそうになるのだが・・・

「そうか？何ならちよつと食い足りないぐらいだぞ？まあ、それだけ料理が美味かったってことだろ」と、恐ろしいことを言った

「ま、まあこいつの食べ物にの量に関してはいつものことだから気にしないで？」

と、連れの少女ネクさんが言った。さらに、

「何かごめんなさいね。大したこともしてないのにこんなにご馳走になって・・・」
と謝られた。

私は焦って、

「いえいえ、とんでもない！本当に助かりました。お礼ができて嬉しいです！あと、色々お話ができて楽しかったです！」

そう、お二人の出身地のカリユウ村の話や、女の子同士の話ができて、私はとても楽しかったのだ。年も私より一つだけ上なため、話も合ったし。

すると、厨房のほうから、「そうだぞ、姉ちゃん！

あいつらは、イグナでも有名な質の悪いゴロツキどもだ。丁度俺が出かけてた隙に店に来て、マーミにちよつかい出してやがったんだ！俺が居る時は全然そんなことしねえのによ！」

と、この店の店主兼料理人兼私の父親、ガッシュ・ナカヤは言った。

（店主は見た目がいかついから、それを怖がっていつもはマーミに悪戯ができないんじゃないか）
俺は密かにそう思った。

（まあ、俺達も飯をご馳走になったから、結果的には良かった、と思うことにしよう）

俺達は食事のお礼をいって料理屋を後にした。

翌日、俺達は町の中心地である場所を探していた。

（昨日は結局、温泉宿屋には行かなかった。だって飯をご馳走になったしなあ。俺の目的の九割は飯、残り一割が温泉だ。そのことについて連れは何か言いたそうだったが、めんどくさいので無視した。）

それで、今探している場所というのは口入屋^{くちいれや}だ。

口入屋というのは、平たく言えば職業斡旋^{あっせん}所で、日雇いの仕事から短期、中長期の仕事を紹介してもらう場所だ。

また、自分で仕事の依頼、人足^{にんそく}の紹介を頼むこともできる。まあ、依頼料に加えて、口入屋への口利き料も必要なので、とりあえず今は関係ないが。えーっと、今の手持ちはと・・・795丸^{がん}か。

もう、何日かは宿屋に泊まれるが、あんまり余裕はないな。

ちなみに、丸^{がん}はこの大陸唯一の共通貨幣で、大陸の初代霸王スサノオが、大陸を探索中に見つけた、数百年程度経った朽ちかけた遺跡から、恐らく貨幣ではないかという数種類の丸い貨幣らしき物を基に作成されたとされている。

作成場所は、これもまた鑄造所らしき遺跡を手本として建てた首都の貨幣鑄造所しかなく、一目見て分かる見た目の緻密さと材質の稀少さからそこ以外では作るのは可能とされているため偽物は作れないはずだ。

材質は一番小さい物から、1丸、5丸、10丸、（銅製）

50丸、100丸、500丸（鉄製）1000丸、5000丸、（銀製）

10000丸（金製）

そして形は呼んで字の如く丸く、大きさは数値が大きくなるたびに一回りずつ大きくなっていく。

1丸は親指の先程度の直径だが、10000丸^{がん}は手のひらぐらいの直径であり、しかも金製なので重い。

物価は、この町で料理屋での定食が一食50〜60丸、宿屋に一泊すれば200〜300丸といったところだ。

旅立つときに親父から1000丸ほど餞別にもらったが、このままでは宿屋に泊まれなくなってしまうので、こうして豊かな生活のために口入屋を探しているわけだが。

「ああ、あった。あれでしょ、この町の口入屋。やっぱりカリユウのより大きいね。」

とネクが左前方の建物を指していたので見ると

「ああ、あれだな。よし、入ってみよう」

俺は言いその建物に入った。

「いらっしやいませっ！」

口入屋に入ると、正面の受付らしき木の机に座った20代ぐらいの目もとのパツチリした髪の短い綺麗なお姉さんが笑顔で元気よく言った。

俺は、愛想よく笑いながら

「元気いいね、お姉さん？ あんまりきつなくて稼げる割りのいい仕事を探してるんだけど、何かいいのある？」

と常連っぽく言ってみた。するとお姉さんは怪訝そうに、

「えっと？ お客さまは以前こちらをご利用されたことがありますか？」

と言うので、

「ないですっ！」

とこちらも元気よく言ってみた。するとお姉さんは若干顔を曇らせながら、

「あ、あのー。それなら初期登録を先にお願ひします。

それと大変申し訳ないのですが、初期登録の方の場合は丙^{へい}の下^げからの仕事しか受注ができないのですが・・・」

と本当に申し訳なさそうに言ってきた。するとネクが

「ごめんなさいお姉さん！ このバカの言い方が悪くて。確かにこちらにお世話になったことはないんですが、別の村の口入屋で登録して何回か仕事をしてきてますんで初期登録は必要ないです。」

と横から言ってきた。
バカってお前・・・

「あ、あーそうなんですか。妙に慣れた感じがしたのはそのせいなんです。では、登録証を見せて頂いてよろしいでしょうか。」

お姉さんが言うので俺とネクは其々の登録証をお姉さんに見せる。

「ほうほう、お二人はカリユウ村のご出身なのですね。お名前はトウヤ・ヒノカ様とネク・カナワ様。

えっ！トウヤ様は等級が乙の中なんですか！？ネク様も乙の下！。

ほうほう、登録証を見る限りお二人は今までにかなりの仕事をこなされてますね？」

何か軽く驚かれていた。

まあ、三年ぐらい前に登録して、色んな仕事をこなして来たからな、それなりの等級にもなるってものだ。

ちなみに等級とは、下から丙^{へい}の下、丙^{ちゅう}の中、丙^{じょう}の上乙^{おつ}の下、乙^{じょう}の中、乙^{こう}の下、甲^{こう}の中、甲^{こう}の上、甲^{とくじょう}の特上

と、十段階に区分されており当然上の等級になるほど難易度が上がってくる。等級を一つ上げるにはその等級の依頼を最低3つは成功させ、なおかつ口入屋の責任者の許可が要る。まあ、魔物退治とか最低限の強さは必要なので、そのへんを見極めるために不可欠な仕組みだと思う。ネクが俺より等級が一段階低いのは倒せる実力があるのに見た目が可愛らしいという理由で兎（毛皮を採るため）を仕留めそこなったり、変な失敗を何回かしたせいだ。

大まかな仕事の内容といえば、丙の下などは草むしりとか家の掃除

とかで、大したことはないが、乙の下とかになると、魔物退治や獣を何頭か狩る、などと難易度がはね上がってくる。

俺は手っ取り早く稼ぎたいので

「ええ、まあ。数は多くこなしてきたんで、少々きついのも期間が長いのも大丈夫ですよ？」

と丁寧に言ってみる。

ちまちまやって報酬が安いのは嫌だしな。

横を見ると俺の言葉に賛同したのかネクもうんうんと頷いている。

お姉さんは少し思案して、

「うーん。そうですね。仕事に慣れてらっしゃるようですし、こちらなんかは如何でしょうか？お二人の希望に沿うことができるかと思われませんが。」

と、受付机から一枚の紙を取り出した。

その紙には、

『鬼族^{きぞく}の村、探索隊募集！
集え強者^{つわもの}！

未知の種族を調べてみよう！

参加資格…乙の下以上の等級者十名程度

参加期間…最短1ヶ月

報酬…お一人最低3000丸、但し成功報酬等は別途ご相談。

依頼人…アズト・ミタラ』

と書かれていた。

第7話く異変く（前書き）

別の人物視点にしてみました。

第7話く異変く

く首都カグツチく

当代の第16代スサノオ王の居城の一角のとある部屋では一人の男が手元の書類を見ながら馬鹿でかい声で怒鳴っていた。

「これはどういうことだ！何故警備兵の被害報告がこんなに多いのだっ！」

警備の者は何をやっておる！他に被害は！」

この方はシバ・ウチカネと言い、『宰相』（さいしょう）という王を武力・経済共に補佐する立場にある、王に次いで地位の高い者である。

年の頃は65ぐらいで、白髪で細く小柄な体格ながらも昔取った杵柄というか、武力官僚出身という経歴に由来するのか、よく日に焼けたその皺の多い顔は陰しくその怒鳴り声は時に王ですら怯ませることがあるというほどの厳しい御仁だ。

私も今より小さい頃はよく叱られたものだ。主に悪戯で・・・その凄まじいまでの大声で怒鳴られながら、

「はっ！事に当たった警備部隊長からの報告によりますと1隊と2隊の警備部隊を総動員して、魔狼の群れを何とか倒し、街の結界内への侵入は防いだとのことですよっ！」

と顔以外を全て保護できる鎧を身に付けた男が答えていた。

こちらの男は名をガロウ・サイハと言い、年は23、高い背丈に引き締まった体格、黒い長髪を真ん中から無造作に分けた髪型、その下にある整った凛々しい顔立ちから、城内の給仕の女の子、首都内の女の子から大変な人気がある。

また、この若さで首都の警備部総隊長を務めるほどの武力の腕を持っていることもその人気に拍車をかけているのだろう。私はあんまり好きじゃないが。

その人気者がそう答えるとシバが、

「戯けっ!! 街中への被害が出ないようにするのは警備隊として当然じゃっ!

儂が言いたいののは、何故たかだか魔狼の群れ15頭程度に2部隊48人のうち怪我人が10人も出たかと言うことじゃっ! ましてやその内の重傷者が2名じゃとっ!

最近の警備兵は烏合の衆かっ!!!!」

と、さらに怒鳴りつけていた。

すると、ガロウが若干気まずそうに、

「それに関しては面目次第もございません。

今後は今まで以上に訓練に励むように全部隊へ通達致しますっ!」

と答えた。

すると、シバは

「ふんっ! まったくっ! 儂の若い頃の警備部は………」

と長々と説教し始めた。ガロウも可哀想に。

だが、と私は考える。

確かに魔狼はそれなりに手強い。手強いが警備部とは日頃から対魔物用の鍛練をしており、魔狼程度なら並みの警備兵1人でも2、3頭程度なら倒せる実力があるはずだ。それこそ1部隊24人なら魔狼15頭に対して余るぐらいの戦力だ。にも関わらず第1部隊のみならず第2部隊まで投入して、さらに怪我人まで出るとはどうも納得がいかない。

シバとて、そのへんの警備兵の実力などは把握しているはずなのに、頭に血が昇っているのか、その事には触れずに結果だけを見て説教している。どうもおかしい。そう思った私は説教がうざいということもあり、声をかけてみる。

「シバッ！説教はもうそのへんでいいんじゃない？

そんな昔話よりも今の問題は魔物が街近くまで侵入してくる現状をどうにかすることだと思うんだけど。警備兵の訓練にしたっていきなり強くなるものでもないしね。」

するとシバは

「確かにそうかもしれないがのう、姫。じゃが最近魔物に襲われることなく、弛んどった警備兵にも責任はあるじやろう？なにより今の若いモンは実践経験が少なすぎる。

儂らの若い頃は今よりも危険な任務ばかりじゃったぞ。」

姫と呼ばれた私は、

「でもねえ。私もお父様と何回か警備兵の訓練見たことがあるけど、お父様も別に訓練内容に文句なさそうだったわよ。ねえ、ガロウ？」

と横のガロウに話を振ってみる。

ちなみに私の名前はシエル・スサノオ、年は15のうら若き乙女だ。父は現国王の第16代スサノオで、一人っ子の私は第一王位継承者となる。

（まあ、婿を迎えればそいつが王になるのだが、私より弱いやつと結婚する気はさらさらない。

自分で言うのもなんだが私の容姿はそれほど悪くはない・・・と思う。

今は亡きお母様譲りの栗色の髪を短くまとめた髪型にそれなりに整っている・・・と思う顔、贅肉のない引き締まった体、あまり大きくない胸・・・

だから高官の息子とか親族が私を見て怯えるのは見た目の問題じゃなく小さい時から剣術の実験台でボコボコにしてきた結果だ・・・と思う・・・）

なので、今年元服を迎えた私は政務を覚えるために、宰相であるシバに付き合って、ここ執務室でガロウの報告を聞いていた。

「はっ！ありがとうございます姫！しかしシバ殿の言われる通り警備兵達にも弛んだ部分もあるかと思えますので、訓練は増やそうと思えますっ！」

と言うので私は、

「うん、それはそれでいいんじゃない？」

それよりも私が言いたいのは何故精鋭の警備隊が魔狼相手にそこまです傷を負ったってことなんだけど。

シバ？報告書にそのへんの所見はある？」

するとシバは、

「まあ、実は僕も最初そう思った。いくらなんでもそこまで苦戦するとは。う。だが報告書には魔狼の数、出撃人数、襲撃してきた日ぐらいしか書いてないのう。何か追記はあるか、ガロウ？」

と言い、ガロウは

「はっ！自分は事後報告しか受けていないので実際にその魔狼を見てなく、各部隊長の言い訳かとも思うのですが・・・」

と歯切れ悪くなったので、私は

「いいから、どういう風に言われたの？」

と促すと、

「はい、報告の際に、第1第2部隊長が口を揃えて、「今まで戦ってきた魔狼よりも数倍強かったです！」と言っておりました。

日付は報告書に書いてある通り4日前です。まあ、今まで魔物の襲撃を経験したことなく不意をうけたところもあるでしょうが・・・」

と言った。私は、

「ふーん。数倍強いねえ。言い訳にしてもおかしいわね。でも、あの真面目な2人がそう言うなら、冗談とか言い訳でもなさそうだから、それこそ実際に強かったんでしょ？」

と言った。するとシバは別の報告書を見ながら、

「ふむ、偶々魔物が襲撃したのも4日前か・・・直接は関係ないとは思うが、4日前に大陸の南のほうで何か大きく光ったという報告も入っておるな・・・こちらは何か起こったか見当もつかんのう。」

と何かブツブツ言っていた

「シバ？光ったって何が？どこが光ったの？」

気になったので聞いてみると、シバは

「まあ、魔物の襲撃云々とは別の報告なんじゃが、大陸の南、イグナ町に治安の管理者として置いておる者からの報告でな、4日前の夜にある場所・・・これは島じゃな、島から大きな光が見られたという報告じゃ。ふーむ。」

と言うので、その話が気になった私は、

「とある島？どこなの、その場所は？」

と聞いてみるとシバは、

「ああ、結界外の場合じゃな。イグナの町から数10？離れた場所にあって直接近くで見たわけではないが、その方角にはその島ぐらいしかないのでおそらくその島に間違いないじやろうという報告じゃ」

と言うが私は場所にいまいち見当がつかないので、

「ふーん？結界外なら人は住んでないんでしょう？何なのかしら、そ

の光？」

と疑問に思っ言うと

「ああ、人は住んでおらんじやろう。ただ大陸平定当初にスサノオ王が結界を張れなかったというその場所には、ある者達が住んでおるとい話じゃよ。

儂も見たわけではないから詳しいことは言えんがのう。」

と言うので、私は

「結界が張れなかった？

ある者たち？ どういうこと？」

と言うとシバは、

「ああ、結界はある強大な力を持った者たちに阻まれて張れなかったと、文献で見ただけじゃ。

255年前、当時大きな力をもった妖術師と呼ばれた者たちの力を持ってしても、それは叶わなかったらしい。

その時島に居たのが人語を解し、人の形に近い人在らざる異形の者、あじん亜人だったという話じゃ」

と言うので私は、

「えっ！？ それってもしかしてお伽噺とかに出てくる鬼とか、妖精とか、あの？」

と言うとシバは、

「そうじゃ。まあ、若干種別が違う気もするが・・・ともあれ、魔

物と違いそれら亜人^{あじん}などは滅多にお目にかかれんが当時の書かれた文献には絵入りで書かれておったよ」
とシバが言うので、私は興奮し、目を輝かせながら

「へえーっ!! 亜人って実在したんだっ!!
すごいね!!」

そこにはどんな亜人が住んでるの!？」

と言うと、シバはこう言った。

「その島のことは、こう書かれておったよ」

『鬼族^{きぞく}の住まう島鬼ヶ島^{おにがしま}』
と。

第8話く島く（前書き）

話があんまり進まないですが・・・

第8話　島

「いやー、予定人数には少し足りませんでした。それでもこれだけの方々に参加いただけたとは思いませんでしたよ！」

ワハハハ！　と走行中の蒸気と帆を動力にした船の先頭に座っている男が上機嫌にそう言った。

名前をアズト・ミタラと言い、一昨日口入屋に言ったときに面白そうなお仕事の依頼をしていた男だ。20代後半ぐらいで意外と若い。聞いた所によると商人兼探索屋で様々な場所取引しつつ、未知の場所や財宝などを探しているらしい。

あのあと口入屋で受付のお姉さんに他の依頼書をいくつか見せてもらった俺たちは軽く相談し、最初に見せてもらったアズトの依頼を受けることにした（一つ依頼を受けると依頼を完遂するまで重複は不可なため相談した。）

資格も依頼条件に合ってたし、中々稼げそうだし、なにより鬼族きぞくについていう言葉にとっても興味が沸いたからだ。

どんな姿をしてるか、とかどれだけ強いのか、とか。まあ、そもそも旅の目的が色んなものをみたり、強くなったりすることなんでそこは仕方がないと思う。

それにしても当初の予定より数が少ないらしいが、これで大丈夫か？　とも思う。募集は10人程度とは書いていたのに俺とネクとアズトを入れても9人しか居ないぞ？　予定人数に足りなくていいのか？　まあ、依頼内容は調査ということらしいが。それとも、人数が揃うまで待つてられない何らかの事情があるのか？

と、アズトの言葉を聞いて参加者の中で一番年嵩の男が口を開いた。

「ふん、お主のその口ぶりだとよほど参加者の応募が少なかったとみえる。

報酬の嘉多は兎も角、内容はそれほど尻込みするほどのものではないと思っただがなあ？」

と他の参加者を見回しながらいう。

最初の自己紹介のときもおっさんは文句を言ってたな。この程度の依頼内容で人が集まるのが遅いだのなんだの。

たしかこのおっさんの名前は、レンジ・ミタノ、等級は甲の下だったか、見た目は色んな戦いを経験してきたみたいないくつかある顔に髭を無造作に伸ばした坊主頭、うちの親父ぐらい大柄な筋肉質の身体を鋼の大鎧に包んだ大体40歳前後ぐらいか。得物はそばに置いてある槍だろう。

と、おっさんの連れらしき男が慌てたように言った。

「い、いや、そうは言いますけどねレンジさん。僕たちみたいに依頼が始まってすぐに偶々口入屋さんに言った方は少ないんじゃないでしょうか。」

それにレンジさんだって丁度運よく中期の仕事が見つかったって喜んでたじゃないですか？」

この男はおそらくレンジという男と今までに何回か一緒に仕事をしたことがあるのだろう。気安い感じで喋りかけている。

こちらの男は名前をリクオ・シクラと言い、レンジよりも5〜6歳は年下に見える。見た目は短めの黒髪に浅黒い顔、多少小柄で引き締まった俊敏そうな身体に動きやすそうな革の鎧を見につけている。確か俺と同じ乙の中の等級でこちらは得物が左右の腰に差した二刀か。

アズトが、

「いや、私も募集期間は長いとは思ったんですよ。ただ、以前別口で似たような依頼をした時に募集期間を短くしすぎて人が集まらなかったのです。

まあ、今回は募集期間をあまり長くしすぎても機を失ったら元も子もないので、早めに募集を打ち切りましたが……」
と尻すぼみに答える。

すると

「まあ、良かったんじゃないの？ 予定人数はほぼ集まったんでしょう？ この子達は見た目以上に役にたちますよ？

それにこれだけ屈強そうな殿方たちが居るんだから充分だと思いますよ♪」

と同じ顔をした2人の少女に挟まれた妙に色っぽいお姉さんが言った。

このお姉さん名前はリシナ・トゴウと言い、年は20代半ばぐらいで、見た目は肌の白いやたらと整った小さな顔に、色素が薄いのか茶色いさらさらの髪を肩まで伸ばしすらりと高く細い身体にでかい胸と尻を包む上が白く下が黒い羽織袴のような服で雰囲気がかく色っぽい。

等級は乙の上で得物はまあ見たまんま弓だろうな、あと手元の分厚い本も何なのか気になるが……

お姉さんの言葉を聞いた、傍らの右側の負けん気の強そうなほうの少女が

「そうよ！ 私たちが居るんだから何も心配なくていいよ、ね！ 師匠！

おじさんもそんなにくよくよしないで大丈夫だよ！ 私たちが居るんだから！」

と、朗らかに答える。

二回言わなくても・・・

ちなみにこの少女は名前をアリナ・クロカゲと言う。ネクと妙に気が合って話してみたいなんて年を聞いたら俺達の一つ下らしい。見た目は黒髪をおかっぱにし程よく日に焼けた目元のパツチリした美少女と呼べる顔、ネクより僅かに低い背丈に細い身体にリシナさんと同じような羽織袴を着ている。身体の凹凸はリシナさんに比べると少ないもののそれなりに出るところが出ている。等級はネクと同じ乙の下で得物はリシナさんと同じ弓か。

「わたしはまだギリギリ20代なのですが・・・おじさん・・・はあ、頼りにさせていただきますよ、クロカゲさま。」

アズトが軽く落ち込んだように言う。

すると、リシナさんの傍らのもう一人の少女が

「・・・うん・・・がんばる・・・」

とボソつと言った。

こちらはアリナの双子の妹でユリナ・クロカゲという。見た目はアリナとほぼ一緒に等級も一緒だが見た感じ性格はアリナと比べて大人しそうだ。得物は・・・ないな。いや、腰に差した短刀か？ それとリシナさんが持つてるような本と似たような本が手元にあるが？ あの本は・・・？

「ま、まあとにかくみなさんよろしくお願いしますよ！もうそろそろ島が見えてくると思いますので！」

と、アズトが大きな声で言った。

そのとき一番後ろに離れて座った男が口を開いた

「・・・漸く島か。漸く鬼と戦うことができるのか・・・」

その男は低い声でそう言った。

見た目は、頭から顔まで覆う兜を被っており、身体もすべて覆いかくすようなこの大陸に伝わる鎧とは意匠の異なる銀色に輝く鎧を身に付けている。

名前はミシル・タイナって言ったか。背丈は大柄でおそらくレンジより少し高いぐらいではないかと思う。兜を取ってないので顔と年はいまいちよくわからんが、声の感じからおそらくそんなに年はいってないと思う。20代半ばから後半ってところか。

等級は乙の上で得物は背中に背負った大剣だろう。

それはともかくこいつは今鬼と戦うって言ったか？

確かに全員武装してるがそれはあくまで島に生息する獣とか魔物とかへの備えだろ？仮に鬼が居ても調査が前提の依頼でこいつは何故戦うことが前提なんだろう？

そんなことを考えているとネクが

「ねえ、ホントに鬼族って居るのかな？」

と言ってきた。依頼を受けてからずっとこの調子である。楽しみにしすぎだろ、こいつ。

「多分な。会えるかどうか分からんが。」

古い本で読んだことがあるが、かつて、それこそ250年前か？には実際に鬼を見たこともある人が居るらしい。その当時の記録はあるからな。

ただ気になるのは、その当時からかなり文明が発達して今みたいに大して時間もかからずに行ける距離なのに何故今まで誰も行っていないのか。行く価値すら無いと判断したのか？

いや、もしかしたら行った人も居るかもしれないが鬼族に会ったという記録もない。何故その記録がないのか？それが分からん」

と俺の話を聞いていたのかアズトが、

「ええ、もちろんヒノカさまの言う通り過去にも何回行ったという記録はありますよ。」

ただ、それは海の途中で断念して引き返したりだとか、予算の都合上だとか、島内の地理が険しいとか、様々な理由があるらしいです。それで結果としては悉く鬼族に会えなかったということです。

かつて鬼族に会えたのはスサノオ王率いる妖術師を含む優秀な調査団だけでスサノオ王や妖術師が居たから何らかの特殊な力を使って鬼族に会えたのでは、というのが今現在の最も有力な説です」

俺は、

「じゃあ、アズトさんは何故今回はこの計画を実行しようと思った？過去に何度も失敗してるなら今回も失敗の可能性が高いと思うが？スサノオ王も居ないし、妖術師も居ないのに」

疑問に思っただけ聞いてみる。リシナさんが何か言いたそうにしたがアズトが、暫く何かを考えるようにして、

「そう思われるのはごもっともだと思います……ここまできたなら正直に白状します。実は今回の依頼に関しては政府が大元

の依頼者なのです。

そして依頼書には便宜上、鬼族の調査依頼と書きましたが、実際の目的は違うのです。」

と言うので俺は

「目的が違う？」

じゃあ何のためにアズトさん、いや政府は結構な予算まで使ってこの依頼を行ったんだ？」

微妙に納得できないので聞いてみた。するとアズトは

「それは島に到着してから話そうと思っていましたが・・・いいでしょう。今からお話します。隠すことでもないですしね。

実は今から約1週間前の夜に、これから行く鬼ヶ島で大きな光が観測されたそうなのです。一番近い町であるイグナの観測所から見られたので光った場所は鬼ヶ島に間違いありません。それに何か不吉なものを感じた政府つまり王ができる限りその光が何かを早く迅速に調査すべきだと判断し、イグナに拠点のある商人の私にイグナで人を募って調べろと私に命じたのです。

首都から調査隊が来るまでは時間がかかりますしね。何かあるか居るのか分からないので本当はまだ人数が欲しかったのですが、そういった事情により募集の延期が不可能だったので、募集を希望人数以下で打ちきったのです。」

と教えてくれた。するとネクが、

「えっと、じゃあ鬼族に関しては何もしていいということですか？」

と尋ねた。するとアズトは

「いえいえ、そもそも島のどこが光ったか分からないため結局は島全体を調べてもらうことになります。その過程であわよくば鬼族に遭遇できたら何かしら結果を残したい交流をしてみたい、とは当初から考えています。最低期間の1ヶ月とは島を調べながら回るのにそのぐらいはかかるだろうとのことで設定しました。」

ネクが、

「わかりました。教えていただきありがとうございます。」

別にやることは変わらないようだし、何故急に鬼ヶ島へ行くのか理由がわかったのですっきりしました。」

と言う。アズトが、

「みなさま、そういう事情ですので、よろしくお願い致します。つと、見えてきました。あのうつすら見えるのが鬼ヶ島です!」

と進行方向を見ながら行った。感覚的にはあと20〜25分ぐらいで着くだろうと俺は見当をつけた。

それから適当に雑談しながら15分少したった頃、俺達が乗っている舟は鬼ヶ島まで数百mの距離まで近づいた。

アズトが、

「あと5分ぐらいで島に着きます! みなさん! 準備はよろしいでしょうか!」

というので、参加者が各々返事をしたり身支度をし始めたりした。

「では、みなさま。島に着きましたらくれぐれもはぐれないように・・・」

と、アズトが注意事項を言おうとしたとき、

ドーーーーーンッ……!!

という大きな音がし、それとほぼ同時に、舟のすぐ傍の海が大きな衝撃に襲われた。

第9話く大砲く（前書き）

少し間が空きました

第9話く大砲く

それは唐突に起こった。

転覆こそしなかったものの乗っている舟は大きく傾き水飛沫が波となり舟を覆ったため、最初は何が起こったのかは一瞬分からなかった。

ただ、先程聞いた音と現在の状況を鑑みるに、乗っている舟そのものではなく、すぐ傍の海に何らかの攻撃を受けたのだということは分かった。

俺は舟の周りを見渡して、凡そ数百m後ろのほうに僅かに白煙を上げている舟が一隻見えた。

火の大陸では火の神剣の恩恵によるものか硝石がどの大陸よりも多く採掘される。

硝石はそのまま使わずに加工することによって火薬となり使うことができる。暦が始まる前ですらもほぼ全ての集落で加工方法は確立されていたのはこの大陸ならではの特性だとも言える。加工された火薬は様々な面で人々の生活に活用されている。

それは、日常生活において調理や風呂焚き、鍛冶などの火を使う作業の際に燃焼を促進するためというのが最も普遍的な活用方法であるが、一部の者にとっては別の利用方法がある。

例えば首都や街、大きな町などにある技術研究所では、過去の文献資料や遺物を基にした様々な研究、開発を行っているが（場所によって規模や求める内容の違いは勿論あるが）、その研究の中でも最

も急務とされるのが燃料、武器、この2つの確保、開発である。

まず燃料の研究の必要性とは何か？

それは移動の効率化、新たな移動手段の開発にある。

現在でも馬車などの移動手段はあるが、舗装がされていない山道等が各集落を繋いでいるため移動速度は決して早くない。辺鄙な場所にある村へ行く際にはその手前の村に馬車を預けることもあるぐら이다。

それゆえ一部の富裕層を除いて馬車の使用方法はあまり好まれていない。

そういった現在の状況により燃料を優先的に研究するのは必然とも言える。

そして、かつて数千年前にあったとされる文明においては移動について驚くべき記録が遺されていた。

それはこの広大な大陸を僅か2日程度で縦断していたというものだ。現在でこそ約二十年前に確立された蒸気船の移動速度により海上の移動においてのみ、大陸の端から端まで約10日程度でたどり着くことができるが（海上で運よく魔物に遭遇しないことを前提として）かつては陸路を通して大陸を縦断するには最低でも半年はかかると思われていた。

なので、各村や町の交流、非常時への迅速な対処などの理由から陸路においての新たな移動手段の確保、移動手段への燃料の開発は最も急いで確立すべき分野だとされている。

（ちなみに実物や絵こそ遺っていないものの文献から推測された移動手段の形は、車輪が2つないし4つある本体に動物を利用せず燃料を利用した数人でいど運べる無機物、車輪を利用せず移動手段用の専用通路が確保された数百人が一気に移動できる燃料を利用した大きな無機物が検討されている。

前者は普遍性はあるものの移動手段である本体の開発における途中過程が行き詰まりまた燃料の確保開発方法に検討もつかない状態で

あり、後者は蒸気船の応用により移動の原理や燃料は解析可能なもののようにも思えるが実は、現在ある道の整備且つ移動用の専用道の確保が先ずは先だという、大きな問題点を抱えている。

武器の開発については、新たな移動手段の発展と同じく大きな規模で研究が進められている。

基本的にこの大陸で武器というのは、魔物との戦闘用のものをことを指す。

倒しても倒しても絶滅することのない魔物、その発生源や発生要因は魔物の分布図を作成する際にも不明だったという話だが、人を襲ってくる以上はそれに対抗する手段を得なければならぬ上に素手の格闘のみでは限界があるので、より効率の良い武器の開発というものは必須となる。

対抗手段の主流としては剣術だが、遠距離からの攻撃ができる弓、石や刃物の投擲も戦法としてよく使われる。（とうてき）（鉄鉱石の採掘、鍛冶屋、警備兵、等は安定して職が得られるためなろうとする者は少ない）

なので、剣や弓等の武器屋は大抵どこの村にもある。だが、戦いの手段を持つもの自体は、人口の多い街ならばともかく人数が少ない村などは少ない、もしくは1人も居ないというところがあるため、例えば大量の魔物に襲われたり不意に襲撃を受けた際の対応等が懸念されている。

そんな状況の中、20年程前に火薬を利用した武器の開発をしてはどうかという声が上がリ、数年前試作品とも言えるものが完成した。それが大砲である。

大砲が現在の形となった経緯は（まあ、実物を見たことはなく村に來た行商人に話を聞いただけだが）首都近くの沿岸に置いてあった奇妙な形の彫像を調べていくうちにその用途が推測され、昔の文献を調べるとその彫像、弾の作成、使用方法が載っていて火薬や鉄を使用し、それを基にして完成にこぎ着けたという話である。

大砲の利点としてはその大きな威力、非力でも使い方が解れば誰でも使えることにあるが、欠点としてはその重量により持ち運び、移動が困難なことにある。

また、技術的、予算的な問題により現在のところ首都にしか製造場所がなく、他の町への移動には時間がかかるため完成した数個は未だに首都にあるはずだが、とそこまで考えて声がした。

「ね、ねえ今のって・・・」

ネクが不安そうに言うので「大砲だろうな。」
俺が簡潔に言うと、

「やっぱり！でも、どうして!？」

このどうしてには2つの意味があると思う。つまり

「どうしてっていうのは、どうして海上に大砲があるのか。どうして俺達を、おそらくこの船を撃ってきたか、だな」

もう1つ疑問はある。

聞いた話じゃ大砲ってものの射程距離は最大で数十m、つまり視認はできるがあれだけ離れた距離から届いたのはどういう理由だ？

技術が進歩した？短時間で大幅に？あり得ないだろ。首都にある最先端の技術で漸く固定式、車輪式の大砲が完成したというのは、結構最近の、ここ数ヶ月程度の話だったはずだ。あり得ないだろ。いや、そんなことよりも、

ドーン！！！！

音がして今度こそ船に直撃したか、と思ったとき、
船より約20m程手前で、砲弾らしき塊が空中で爆発した。見えな
い壁でもあるように。

「えっ、何今の？途中で止まった？」

「止まったな。どうということだ？」

ネクと同様俺も全く意味が分からなかったので、だれか説明してくれないかとあたりを見回してみると、

「出来れば使いたくなかったんだけどね。流石にこの状況がしょうがないか。」

リシナが船の後ろ側、もう一隻の船の方向に両手をかざしながらそう言った。

よっぽど皆怪訝な顔をしていたのだろう（双子の姉妹は妙に嬉しそうだが）

慌てたようにリシナが続けた。

「つまり、大砲に狙われてると思ったので対衝撃用の不可視の壁を作ったんですよ。」

と照れくさそうに言った。と言われても・・・

「結界術の応用ってことよ！師匠は凄いんだから♪」

双子の姉アリナが胸を張って言う。

「結界術？つまり妖術か？」

俺が疑問に思い聞くと、

「古いなあ、言い方が。」

昔は確かにそういう風に言われてたけど、師匠は退魔師なの。だから厳密には退魔術って言うべきね！」

偉そうに言われた。

「成る程。こういう理屈か分らんが、その退魔術とやらを使って

砲弾を途中で止めたわけか。凄いな。でも退魔術つまり結界術は昔にその技術が失われたんじゃないかったのか？使い手が居なくなつて」と言う、リシナが

「ええ。確かにそうなんだけど、うちの家系は代々魔物退治を生業としていてね、様々な技法を研究していてその過程でかつて妖術と言われてたものの技術を確立したの。」

と言うが、そんなに簡単なものだろうか？

「まあ、とにかく助かりました。ただこちらへ攻撃した輩はまだあそこに居るので、取り敢えずどうしましょうか？逃げられるかどうか・・・」

アズトがそこまで言ったところで、

ブオーーーンッ！！
ドルルルッ！！！！

と言う音がした。

ネクと俺が、

「なんかあの船、どんどん近づいてない？」

「ああ、凄い早さだな。」

見ると先ほど変な音がしてから、船がこちらへ物凄い早さで接近している。

距離凡そ300m、200m、100m、50m、・・・

乗っているやつが姿が視認できるようになったので見ると見たこともない格好をしていた。派手な色合いの服、身軽そうな格好だ。

それに細長い筒みたいなものを手に持っているが、あれは・・・？

距離30m、20m、・・・

そこまで近づいたとき、

ミシィ！

という何かが軋むような音がして接近が止まった。

乗っているやつらが慌てたようだが、おそらく先ほどリシナが張った対衝撃用の壁にぶつかったのだろう。しかし結構な早さでぶつかって船に傷がないのはよほど頑丈な作りなのか？それにとんでもない早さだった。

あいつら（ざっと20人ぐらいか）が手に持った筒を此方へ向けた瞬間、

パンッパンッ！

という音が鳴り、見えない壁のあたりに小さい塊が一瞬止まり十数個の塊が海へ落ちた。

あの筒はつまり飛び道具か！火薬を利用した小型の大砲みたいなものか？

威力はいまいち分からないが・・・

「ダメね。そろそろ限界みたい・・・」

という声がした。

見るとリシナが青い顔でつらそうにしていた。

「やっぱり、規模の大きな結界を張ると妖力ようりよくをかなり使うみたい。」と、しゃがみこんでしまった。つまり壁がなくなっただということだ。あいつらは間違いなく敵だろうな。しょうがない。

「ネク、俺ちよつとあっちに行ってくるわ。」

と言いながら、オーラを全身に纏わせて身体の強化を行う。

そして20 m程跳んだ。

第10話〈疑問〉（前書き）

ようやくとりあえずの目標十話を達成しました。

これもひとえにご愛読いただいている皆様のおかげです。
今後とも、よろしければ拙作にお付きあい下さい。

第10話〈疑問〉

〃
〃
〃

私は、私という存在を為すものを殆ど全て失った。

あの日から・・・

〃
〃
〃

あの日・・・ウォルス王国、その王族を護る立場である護衛騎士、その隊長である私ミシエール・オルレアンはいつものように王宮に出向き責務を果たしていた。武官長会議、部隊編成の相談、王家の食事の付き添い、など本当にいつもどおりの1日だった・・・その筈だった。

だが、それは突然起こった。

いや、やって来たというべきか。

夕食も終わり、1日の責務も別の者との交代時間が近づいていた、ということもあり多少私の気が抜けていたということを差し引いても、私の動揺は護衛騎士隊長にあるまじき対応の遅れに表れていた。王宮内、しかも王の寝室の扉の前にそいつは立っていた。私よりも一回りは小さく見えるその全身を覆う黒いローブを身に纏い、その右手には銀色に輝く杖を持っていた。唯一見ることが出来る肌の部分、両手とフードに隠された顔の下半分は驚くべき白さだった。

如何にしてここに？という疑問、あまりにも唐突すぎる出現、ということもあったが、何よりそいつのあまりにも異様な雰囲気には私は立ち竦んだ。

明らかな害意らしきものを持ってその場所にそいつは立っていた。だがそれも一瞬のことで、

「何者だっ！貴様っ！」

と、私がそいつへ向かって言うത്そいつは

「貴方に用はないわ。邪魔をしないで頂戴。」

と丁寧な口調で言った。

若い、まだ少女と呼んで差し支えない女の声で。

「貴様っ！ここがウォルス王の寝室と知ってのことかつ！」

私はそう言いながら背中に背負ったバスタードソードを抜いた。

「勿論。王を消す為にここに来たのだから。面白いことを言うのね貴方？」

「貴様っ！！」

言うと同時に私は約5m程度の距離を一気に飛んで詰め、剣をふりおろした。

だが、

ギインッ！

弾かれた。

何も持っていないあの細い左手で。

「な、なに？」

今起こったことが信じられなかった私は、更に剣を振った。何回も。何回も。

ギンッ！
ガギッ！
ガインッ！

しかし、全て左手に弾かれ、防がれる。

何者だ・・・いや、今はそんな場合ではない。

こうなれば、最も強力で速い技を出すしかないと思った私は、一瞬呼吸を整え・・・

「セイヤアッ！！！」

銅を狙った高速の一呼吸での三連突きを繰り出した。

ギンッ！ギンッ！ギンッ！だが、全て左手に全て弾かれた。

「ハアッ、ハアッ、まさかこんなことが・・・この私がこうも簡単にあしらわれるだと・・・？」

「ふうん。この国の剣技は中々のものね。消すのは少し勿体無いかしら。」

「き、貴様！消すとはどういうことだっ！？それに何故王の命を狙うっ！？」

「フフ、消すっていうのは分かりづらかったかしら？文字通り消滅させるのよ、この国を。何故？決まっているじゃないの、邪魔だからよ。王も国も。まあ、他の歯ごたえのないのよりは貴方は多少ましだったから残してもいいわね。」

と、少女は言いながら

「まあ、貴方とのお遊びに付き合うのは飽きてきたからそろそろ終わらせるとしましょう。」

そう右言い、手に持った杖を此方へ翳しながら、

「フアング」

そう言った瞬間杖が物凄い勢いで太く長くなり、それが私の銅へ伸び私の身体は杖で壁に押し付けられた。

「ガハアッ！」

私はあまりの衝撃に声をあげながら、口から血を吐いた。

「あら、呆氣ないわね。まあ、私の波動に触れながら戦えるだけでも大した腕だけどね」

そう言うのと少女は杖を元の大きさに戻し左手を扉に向け、扉を吹き飛ばした。そして無造作に中に入ってしまった。

途端に中から、

「貴様、何者じゃっ！ミシエールッ！曲者じゃっ！ミシエールッ！」

というウォルス王の声が聞こえてきた。

「ウォルス王っ！

お逃げくださいっ！！」

倒れ伏した私は氣力を振り絞ってそう叫んだ。だが・・・

「ぎゃーーーーーっ！」

という断末魔の悲鳴が聞こえてきた。

「ウォルス王ーっ！」

それを聞き私はウォルス王の死を覚った。

少しして、

「ふう、お掃除終わり。」

と言いながら少女が部屋から出てきた。

「き、貴様よくも、」

私は倒れた状態で少女を睨み付けながら、そう言った。

「ふふふ。貴方しぶといなだけじゃなく精神力も大したものね。」

何故か嬉しそうに少女が私を見てそう言った。

「殺してやるぞ、貴様あ」

「そうね。そのぐらいの気持ちならいつか辿り着けるかもね。貴方なら・・・」

「何を言っ、グハァ！」

よろめきながら立ち上がった私を少女が杖で打ちすえ、私は意識を失った。

「まあ、貴方が生き残るかどうかわからないけど、可能性はあるわ

ね。」

少女は独りごちて、僅かに微笑した。

くくく

目が覚めたとき私は悪い夢を見ているのだと思った。何故なら目の前には、

「すっきりしたでしょう？」

後ろから声がしたが、

「な、なんと・・・い・・・う」

私は振り向かなかった。

何故なら、目の前の光景に目を奪われていたからだ。

「ど、どういうことだ・・・ここは何処だっ！」

私は混乱しながらも、後ろを振り返り少女に怒鳴った

「何処？ 貴方の祖国でしょう？ いえ、正確には元祖国と言ったほうがいいかしら？」

その声を聞き、私はさらに混乱した。

あたり一面火の手が上がり、建物らしきものすらないここが我が国だと？

バカな！

「まあ、信じられないのも無理はないでしょうね。でも、」

と、少女が言いながら自分の真後ろを指した。
そこには、先ほどまで自分が居た城があった。ウォルス城が。

「ウォルス城だ・・・と？」

驚愕に満ちた目で私は城を見た。何故なら、城の周りにあるべきものが何処にもなかったからだ。

「バカなっ！！これがウォルス城なら他の建物はっ！！町はっ！城下町はっ！私の家はっ！」

「全部燃やしたわ。人々と一緒に。」

「ふざけるなっ！そんな戯れ言をっ！」

「信じられないのも無理はないけどね。こうやったのよ。」

と少女は言うのと、城へ向かって杖を翳しながら

「ヘルブレイズ」

と言った。すると凄まじい規模のそれこそ城ぐらいの蒼白い炎が出現し、瞬く間に城を呑み込んだ。

「あ、あ、あ・・・」

「つまりこういう風にしてウォルス王国を燃やしたっていうこと。理解できた？」

私は目の前で起きたあまりに現実感のない出来事にただ呆然とした。

「あらら、分かりやすく説明したつもりだけど、驚かせたかしら？」

「き、き、貴様は、な、何者だ。な、何故こんな残虐非道な真似をするっ！……！」

「何故？先ほども言ったけど、邪魔だからよ。この国が。それに会いたいモノがあるから。私が何者っていうのは知らないほうが良いと思うわ。もし、いつか辿り着いたら自然と分かることだしね。」

「辿り着く？どういう意味だっ！？」

「そうね、可能性がある貴方には辿り着けるヒントぐらいあげましょうか？」

「そう言う少女は少し寂しそうな顔をした。そして、
「まず私は、人間ではないの。そうね、この水の大陸や他の大陸での呼称で言えば亜人とか鬼とかデビルとか呼ばれているわ」

「そう言うとおもむろに被っていたフードを捲った。

そこには、長く伸ばした金髪に青い目をした一目見ただけでは人間の少女と変わらない顔があった。
額から出た角を除いて。

「まあ、見た目の違いと言っても角ぐらいだけだね。あと、年齢で言えば貴方の数倍は上ね。」

「貴様……何処からやってきた……？」

「言ってもいいけど……今の貴方には決して辿り着けないわよ。
それよりも、」

と、言うのと此方へ杖を翳してきた。

「私を殺すつもりか？」

「まさか！折角可能性がある人に会えたもの。ただ今の貴方じゃ駄目ね。もっと強くなってもらわないと」

と、私の周りに光る文字が浮かび上がってきた。

「な、なんだこれは！」

「転送魔方陣よ。今から魔法で貴方を何処かの大陸に飛ばしてあげる。ちなみに貴方を倒したのも、城を燃やしたのも魔法によるものよ。」

「魔法だ・・・と？」

「そう。私は太古に失われた筈の魔法を使えるの。ひょっとしたら貴方も使えるようになるかもね。」

「ま、まで！私を何処へ！」

「さあ？まあ、人が居る大陸だとは思っけど。じゃあ、さよならね。再会を期待しているわ」

そして身体が光ったと思った瞬間、私は意識を失った。

目を覚ましたとき私は山中に居た。

そして人の悲鳴を聞いた。人が居ることと悲鳴の原因が気になりその場所へ行ってみると、1人の男が大きな一頭の熊に襲われていた。幸いなことに言うべきか私の騎士の鎧と愛剣は装備したままだったので、すぐさま熊を倒すことができた。

男に事情を聞いてみると、隣村に行商に行く途中に熊に襲われたしい。

現在自分の置かれた状況を把握するためその男と色々な話をした。どうやら、ここは火の大陸という大陸らしい。1日で様々な信じがたいことが起きすぎて頭が麻痺してしまっただけらしい。疑うこともなく私はその話を信じ、他に当てもないので男と共に行動させてもらうことに頼んでみた。

用心棒が欲しかったらしい男は二つ返事でその申し出を了承した。

男の名はアズト・ミタラと言った。

〃〃〃

3ヶ月程前に自身に起こった出来事をミシエール（今は偽名としてミシル・タイナを名乗っている）は思い出していた。

思い出す契機となったのは先ほどの光景にある。

リシナと名乗った女が見せた技、あれこそあの少女が使っていたような魔法ではないのか？

呼び方は違うみたいだが、共に人智を越えた力という点では似たようなものではないのか？

それに、トウヤとか言ったか。あの少年は今、身体が光り普通では考えられない距離を跳んだが、あれも魔法の一種ではないのか。

この大陸には魔法が伝わっているのか？

当初アズトから鬼の巣窟に行く話を聞いたときはあの少女や魔法に

関して何らかの手がかりが得られるかもしれないかと思っただ、思わぬところから手がかりが得られそうな感触があり、ミシエールは密かに唇を歪めた。

〃〃〃

船に飛び降りた途端乗っている奴らが手に持っている筒を俺の方へ向け、何かを飛ばしてきた。火薬の臭いがしたので、おそらく大砲を小さくしたような物だと俺は見当をつけた。

その武器らしき物からはかなりの速さで塊が飛んできた。

だが、オーラで強化している俺の身体には傷一つつかない。すると、

「何故だっ！何故大砲も銃も効かないっ！！」

と、1人の男が言った。

「と言われてもな。大した威力じゃないしな。全然効かないが。むしろお前らに聞きたいがお前らは何者だ？あと何故俺たちを狙う？」

俺が聞くと、男は

「貴様のような小僧に話すことはないっ！死ねっ！」

と、懲りずに手に持った筒（多分銃というのだろう）を此方に向けて、塊を飛ばしてきた。だが、

「いや、だからその攻撃は効かないって言ってるだろ？そんな無駄

なことをするよりも」

と、塊を弾きながら俺は剣を抜きその男を斬った（手加減は一応した）

男は倒れ、他のやつは驚いた顔をしていた。「俺達を攻撃しているつもりなら俺は降参を薦めるぞ。」

と言いつつさらに近くに居た数人を斬った。

「質問に答えないとどんどんお仲間がやられるぞ。」

そう言うところの中で一番歳上らしき男が答えた。

「俺達は探索者だっ！失われたものを探している。貴様らを襲ったのは先を越されないため排除しようとしただけだ！」

「探索者だと？失われたものとはなんだ？それにお前らの技術だ。この船は何だ？何故大砲がついている？それにこの船はいったい何故あんな速度が出せる？」

俺は気になっていたことをまくし立てた。

「この船はレヴィアス国で最新鋭のモーターと武器を積んでいる。失われたものとは太古の・・・」

男はそこまで言って後ろの男達と何やら話しだした。

「キャプテン・・・どうやって・・・」

「・・・手持ちの武器だけじゃ・・・」

「逃げるにも・・・」

「・・・いっそのこと・・・」

と話してくる声が聞こえる。俺は、何となく納得できず、

「つまりこういうことか。お前らはとあるものを探している探索者で、それを手に入れるため目的の場所つまり鬼ヶ島に行こうとしたところ、先に俺達の船が見えたんで先を越されまいと、この大砲を積んだ船で攻撃してきたというわけか。それにしてもレヴィアス国とは・・・？」

と言った。

「あ、ああそうだ。だが鬼ヶ島だと？あの島は何らかの加護を受けているはずなのだが？」

「加護？ああ、加護という言い方をするならこの大陸は火の神剣の加護を受けているぞ。」

と俺が言うと、男は

「火の大陸だと！？バカなっ！？そんなはずはっ！？な、なら・・・我らは・・・間違ったというのか・・・」

驚愕に満ちていた。

「ん？火の大陸ならまずいのか？」

不思議に思い聞いてみると

「貴様には関係ない！」

と、焦っていた。その態度に軽くムカついたので、

「そうか。何を間違ったかよく分からんが残念だったな。ただ、別に心配しなくていいんじゃないか？」

軽く深呼吸し、

「お前らはここで全滅するんだから、なあっ！！！」力を込めてオーラを放ってみた。

結果、

グオオーっという音とともにオーラの奔流がその船の男たちを襲った。

~~~~~

直接怪我こそしないまでも、その少年から迸るプレッシャーにより我が船の乗組員達は立つこともままらなくなっていく。

これはなんだ？圧倒的な力を感じるが・・・このままでは目的を果たせないまま・・・それだけはっ

決して目の前の少年に勝てないことを覚った私は、

「まで、まってくれ。君達に服従する！だから助けてくれ！」

命乞いをした。

すると、

「へえ、判断が早いな。」

プレッシャーが止んだ。

「まあ別に殺す気はなかったけどな♪」



そう言うと少年は無邪気に笑った。

「とにかく、あんたらの存在とか目的とかが分からなさすぎる。服従とかはどうでもいいが、知っていることを全て喋ってもらおうか？」

「あ、ああ。私も知りたいことがあるしな。勿論話そう。」

こうなったら仕方ない。本来他国の人間に言うべきではないが・・・あの島にはあれは存在しない可能性が高いが、命を失うよりはましだ。まあ、殺されなかったかもしれないが・・・

「とりあえず、その手に持つてる物は渡してもらおうか？」

「勿論だ。そもそもこんな物では君に傷一つつけられないしな。おいつ！」

私は、乗組員に銃を渡すように促した。それを袋に入れ少年に全て手渡した。

「俺より遥かに色んな知識を持った奴があっちには居るからあっちで話そう。あっちまで船を寄せて乗ってくれ。あんたに危害は加えないから」

「ああ、分かっている。ただその前に一つ聞かせてくれないか？」

「ん、なんだ？」

「先ほどの君の力、あれはいい・・・？」

「ああ、あれはオーラだ。一応説明すると、オーラっていうのは人が体内に秘めたエネルギーのことだ。それを体外に出し自分の力として肉体を強化したり、具現化したり、放出したりするなど色んな使い道がある。」

「そうか、あのプレッシャーはそういうことか・・・それで銃も効かなかったのだな。」

「やっぱりあれは銃っていうのか。それはともかく俺もあんたに聞きたいことがある。」

「なんだ？この期に及んで隠し事はしない。」

「先ほど言っていた（失われたもの）とは一体何だ？気になるんでとりあえずそれだけ教えてくれ？」

なるほどと私は頷いて、

「その失われたもの、というのは、つまり太古に存在していたとされるものだ。」

「太古に存在していた？」

「ああ。実物を見たことはないが、私の国レヴィアスでは建国当時よりそれを崇めている」

「崇める？つまり火の大陸で言うところの神剣みたいなものか？」

「神剣？七つの神のことか？」

「そうか・・・火の大陸では剣として伝承されているのか。まあ、どちらが正しいのかは判断のしようもないが。」

船が少年の船に接した。

「いや、1人で頷いてないで説明しろよ。何を崇めていたっていうんだ？」

「神だよ。ただ火の大陸と違い、剣ではなく獣だがね神獣しんじゅうと呼ばれるものだ」

「神獣？」

「そうだ、神獣レヴィアタン、水を司るとされている伝説の獣だ。そこまで話したところで、私は少年と共に少年の船へ移動した。」

## 第11話〈探索者たち〉（前書き）

大した違いはないですが、サブタイトルが今までより少し長くなったりします。

## 第11話〈探索者たち〉

〃〃〃

『大いなる守護者により、この地は護られている。

かつて大地は荒れ果て、海は猛り、およそ生物と呼べるものはその存在さえ叶わなかった。

だがある日、この地に神が舞い降りた。巨大な水龍に姿を変えたその神の御力により、川は流れ出し、大地が潤い、生物が生まれ落ちた。この地と肉体を分けた彼の6大陸と共に。

我らは決して忘れてはならない。今こうして我らが在るのは水神の御加護によるものだということを』

〃〃〃

レヴィアス国聖書より抜粋

「つまり、その祈禱師<sup>きとうし</sup>とやらの御告げに因って、貴方達はこの島を目指して来た、というわけですか？・・・しかも私達を略奪者と勘違いして攻撃してきたと？」

アズトは憤慨しながらそう言った。まあ、怒るのも無理はないだろう。こちらからすれば、いきなり大砲をぶっぱなされて殺されかけたのだからな（リシナがいなければ間違いない船に直撃していた）

言われたガルディアは、

（先ほど自分のことをレヴィアス国レヴィアタン探索団団長ガルディア・ソーイと名乗った）

「そのことに関しては申し訳ないとしか言い様がない。だが、我が国が置かれた状況も察していただけると助かる・・・」

若干すまなそうに言い訳がましく言うが。口だけならなんとでも言えるからな。それにしても、

「まあなんだ、その隣国のウォルス王国だっけか？そこが一夜にして壊滅、いや消滅して、早急に対応策を練る必要性があるっていうのは分かるが、他にやりようがなかったのか？」

と、レンジが疑問に思ったことを言った。

「他に、と言ってもな・・・我が国の王や知恵者、科学者などが全員で相談しても一体何が起こったのか見当もつかない様子だった。」

ガルディアは答える。

が、俺は改めて考えた。

そんなことがあり得るのだろうか？

聞いたらウォルス王国というのは、国土こそ火の大陸の5分の1もないが、人口は約10万人程度しかも文明は明らかに火の大陸より進んでいるであろうレヴィアス国と遜色ない程度だったということだ。建物も木造はあまりなく土を練った硬く燃えにくく崩れにくい材質だったらしい。

もし、ガルディアの話が本当だったとしたらどうやってそんな状態になったのか全く見当がつかないというのは理解できる。

「襲われたことはともかくとして、あの島に何かありそうなのは確定だな。」

俺はそう納得した。いや、おそらく俺以外も皆納得している。が、

「いやいや、それは確かにそうかもしれないけどっ！でもこいつらはあたしたちを殺そうとしたのよっ！」

ネクがガルディアのほうを見ながら興奮した様子で文句を言う。

「まあ、そうだけどなあ。でも、こうやってみんな無事だったし。それに正直鬼ヶ島で何があるかは全然分かってない状態だから少しでも戦力はあったほうがいいと思うぞ？しかもレヴィアス国の技術は大陸に持ち帰ったら丸を稼ぐよりも割がいいんじゃないか？」

「うっ・・・」

俺の説得(?)によりネクは納得できたのか口をつぐんだ。すると、

「いやあ、それにしてもトウヤさんがあれだけ強いとは思いませんでしたよ。」

アズトが妙ににこにこしながら言った。

アリナが、

「そうね、ちょっと離れててよく見えなかったけど、それでも凄い速さで動いてた。何人も一撃で倒してたし。いきなりあの距離を跳んだときは一瞬何が起こったか分からなかったよ。」

と、言った。

俺はそこまで本気でやったわけでもないし驚かそうと思ってやったわけでもないのだが。とりあえず一件落着いたからよかったんじゃないかな。

横でガルディアが苦虫を噛み潰したような顔をしているのはさておいて、

「まあ、さっさと行って片付けたほうが安全だと思ってやっただけなんで。それよりもリシナさんのほうが凄かっただろ？」

「師匠はねえ。確かに凄いけど、もうその凄さに見慣れたっていか・・・師匠なら間違いなく何とかしてくれるっていうか・・・特に驚くことでもないんだよね。」

そう誇らしげにリシナのほうを向きながら言った。

「私も大砲ぐらいなら何とかなると思っていましたからね、退魔術で。ただ、防いだあとはどうしようかと考えてなかったので助かりました。」

此方を微笑みながらリシナがそう言った。

「まあ、こいつらの処遇に関しては、降伏したんだしこのまま上陸して一緒に調査をしたあとで考えたらいいんじゃないかねえか？」

レンジがそう言うのと、リクオが、

「そうですね。ただ単に割のいい仕事だと思ってたら雰囲気は怪しくなってきたんで、仲間は多いほうがいいですね。」

と言った。話を聞くうちに光の正体がいよいよ得体の知れないものに思えてきたのだろう。神獣って。

俺も神獣をどう調べればいいのかさっぱりだしな。

「ああ。此方は殺されても仕方ないぐらいのことをしたので、殺されないのなら勿論協力させてもらう。正直な話を言えば大幅な戦力増強になるのでとても助かる。」



ただ・・・」

ガルディアが言いにくそうにしたので、

「なんだ？」

レンジが促すと

「島内を調査したあと、もしその光の正体がレヴィアタンだったら、我々を解放してくれないか？国に戻りどうしても報告しなくてはならない。」

勿論相応の見返りは支払う。現在、我が国は大変押し迫った状況にある。平たく言えばいつ得体の知れない輩に襲撃されるか気が気ではないのだ・・・だからどうしても結果を報告する必要がある。」

「うーむ・・・どうするよ坊主？」

レンジが何故か俺に振った。坊主って。俺はそんなに子どもに見えるのか？

確かに、実際に降伏させてこの船に連れてきたのは俺だから分らないくはないが・・・しょうがないな。

「いいぞ、ガルディア。解放してやる」

「ほんとかつ！感謝する！」

「ただし、俺も連れていけ。他の大陸それも文明が進んだ大陸を見てみたい。」

「あ、ああそれは構わないが、あの最新式の船でも片道で約1週間かかるぞ。国でも用事を済ませるのに少なくとも10日ぐらいはかかるからこちらへ連れ帰るのは一ヶ月ぐらいはかかるぞ。いいのか

？」

「ああ、構わない。」

「あたしも行くっ！相棒のあたしも忘れないでよね！」

急にネクが言い出した。相棒ってお前・・・この仕事が終わったら別行動しようと思ってたが、別に断る理由がないな。

「だそうだ。ガルディア、いいか？」

「大丈夫だ。」

「あのー、私も連れて行ってもらえませんか？それともう一人。」  
今度はアズトが言い出した。ガルディアとミシルのほうを交互に見ながら。

「アズト？あんた仕事はいいのか？」

「いや、むしろ稼ぐために行きたいんですよ！そもそも水の大陸まで行くにはカグツチにある最新式の蒸気船でも片道一ヶ月は早くてもかかりますからね。それに伴う費用が尋常じゃないのですよ。ガルディアさん、あの速度と大きさの船なら少々の荷物は大丈夫ですよね？」

「ああ、人があと何十人か乗っても余裕がある。その点については問題ない。」

「じゃあ、よろしく願いますっ！」

旅費やら護衛費がかからずに莫大な費用を使わずにいける、とか言うアズトの声が聞こえてくるが、気にしないことにした。

ガルディアがミシルを見て

「その男もだな・・・全部で4人か。まあ、こちらとしては断われる立場でもないし、特に問題はないのだが・・・それとは違うちょっとした疑問というか謎というか・・・」

言うべきが言わざるべきかという風にガルディアが言い淀んでいた  
ので、

「どうした、ガルディア？　どういうことだ？」

聞いてみると、

「いや、な。その男、もしかしたら水の大陸の者ではないかと思っ  
たのだが。」

と、ミシルを見ながら言う。

「何故だ？」

「うむ。先ほど言った水の大陸の国の1つウォルスの騎士があ  
の男が持っているような大剣を好んで使っていたからな。ただウォ  
ルスはもうないし移動手段やウォルスの国交を考えてもこんなところ  
に居るはずがないと思っ  
てな・・・」

こいつは水の大陸から来たのか？　と思っ  
てミシルを見てみたが、

「・・・」

ミシルは何も言わなかった。

「ま、まあそれはどちらでもいいじゃないですか？　そんなことより

も時間が惜しいので早く島へ行きましょう！」

アズトが僅かに慌てたように言った。確かに早くしないと時間をもつたいないな。夜になったら調査どころじゃないし。

皆が顔を見合せ頷き、

ガルディアが、

「お前ら島へ行くぞっ！！この船に付いてこいっ！！！」

自分の船へ叫んだ。

〃〃〃

あのガルディアという男、そう言えば何年か前に見たことがあるな。レヴィアスのウォルス担当の行商人のお供か何かだったか。先ほど黙っていたのは別に素性を知られたくないとかじゃなく、単に我が身に起こったことを説明できなかっただけだ。いや、できなかったというよりむしろ説明しても信じないだろうと思ったからだ。特に不都合はない。

それにしても神獣か・・・あの少女もその類のものだったのかもしれないな・・・

ミシエールはそこまで考え他の者と一緒に上陸の為の準備を始めた。

〃〃〃

そして、

俺達は漸く鬼ヶ島へ上陸した。総勢20人。

ガルディアの船には19人乗っていた。その内何故か未だに立てないやつが5人その看病で1人もう2人は船の管理、整備のために残

した。つまり上陸したのはガルディアの船からは11人（銃はとつくに返している）、俺達は9人だ。

話してみても俺達を殺すよりは（無理だろうが）協力したほうが遥かに効率的だと考えたのだろう。皆協力には納得していた（俺のほうを見て若干怯えていたが）

そして、調査の効率を上げる為に班分けをした。

もし戦いになった際に強さや連携、親しさのバランスも考えた結果、

#### 1班

俺、ネク、アズト、ミシルガルディア（この期に及んでないと思うが万が一の裏切りに備えて俺と一緒にした）

#### 2班

リシナ、アリナ、ユリナ、ガルディアの仲間二人

#### 3班

レンジ、リクオ、ガルディアの仲間三人

#### 4班

ガルディアの仲間五人（1人は副団長とか言っていた）

以上の五人ずつ4つの班に分けて、東西南北へそれぞれ進むことにした。

再会は船があるここで3日後の予定。もしそれまでもどれそうにない場合は合図を送る（火薬を利用した技術で狼煙という物をガルディアからもらった）ことにした。

さあ、行くか！

鬼が出るか神獣が出るか？楽しみではない。

探索者20人は4方向へそれぞれ歩き出した。

## 第12話〈守護者〉

〃〃〃

己の領土内に侵入したモノを感知したソレは、数百年の間何回か繰り返した作業を行うため、侵入したモノの方角へ移動を開始した。金属の身体を持つソレは錆びることなく、壊れることなく、今から己のやることに疑問を持つこともなく、いつものように己に与えられた唯一無二の義務を果たそうとするだけだった。

己の義務、すなわち侵入者の排除を・・・

〃〃〃

「さ、殺風景というか何という、か・・・行けども行けども岩しか、み見えませんねえ。はあ、はあ。ほんとにこの島には何か住んでいるので、しょうか、ふう、ふう。歩くのが、け、結構きつく、なつて、きましたよ。ふう、ふう」

アズトが息を切れ切れにさせながら横から言ってきた。出発してから小一時間ぐらいいは経ったとは思いますが、まだ大して進んではないぞ。でこぼこした岩山を登ったり降りたりしてるだけでそんなに息切れしなくても。

ただ、歩くだけで暇なんで

「そうだな、ここまで進んで分かったことと言えば、このやたらと続く岩山には生き物が居ないっていうことと、アズトが意外におっさんだったってことぐらいか・・・」

真面目な顔で軽く言ってみると、

「わ、私の体力がないのはべ、別に歳のせいじゃありません！いや、商売で、それなりに色んな僻地へ、行ったりするんでむしろ体力はあるほうです！そ、そもそも私はまだ29です！」

と、やたらと興奮していた。おっさんは禁句なのか。

「まあまあ、落ち着いてアズトさん。どうせこいつのことだから暇潰しにおちよくっただけだと思うわよ。だから、あんまり気にせずに。」

とネクがとりなすように言った。付き合い長いだけあって俺のことがよく分かってるなこいつ。

「むう。それはそれで何か納得が行きませんが・・・」

アズトが唸りぶつぶつ言っていた。

ちなみにガルディアとミシルは何も喋らず黙々と歩いている。

「ま、あたしはこいつの言動に慣れてるからね。多少何か言われても気にしないけど。」

ネクが何故か自慢げにそう言うのアズトが、

「そうですか。やはり夫婦ともなると性格も何を考えてるかもよく分かるものなのですね。」

うんうんと何か1人で納得していた。ん？聞き間違いか？今、

「べ、べ、別にこ、こいつとあたしはふ、夫婦なんかじゃないわよ



っ！か、勘違いしないでよねっ！ねっ？トウヤツ？」

そう、やっぱり夫婦って言ったよな。そんなバカな。それにしてもネクもそんなに顔を真っ赤にして怒らなくてもいいんじゃないか。よっぽど夫婦と言われたのが気に入らなかったんだろうな。よし、

「そうだぞ、アズト。どう見たら俺達が夫婦に見えるんだ。俺達はただの幼馴染みだ。」

フォローしとかないとな。

「・・・そうよ、アズトさん。あたし達はただの幼馴染みよ・・・」

何故か項垂れながらネクがそう言った。

と、ガルディアが

「一つ気になったんだが、君たちは見た目に反して結構年齢が上なのか？」

聞いてきたので、俺が、

「見た目に反してっていうのは気になるが・・・俺は15歳だ。ネクも。」

言うとガルディアが、驚いたように

「そ、そうか。やはりそのぐらいか。アズト氏が夫婦と勘違いするからってつきり20歳前後ぐらいかと。」

「ん、ということはレヴィアスではそのあたりの年齢にならないと

結婚できないのか？」

聞いてみると、

「ああ、正確には18歳からだかな。」

「なるほどな。ちなみに火の大陸では15歳からだ。そのへんの決まりごととか、文化の違いも興味深いな。」

そうやって俺達は互いの文化の色々な違いなど様々な話をしながら岩山を進んでいった。

そうこうするうちに漸く岩山の切れ目が見え、岩山を降りた先にはやたらと広い平原に辿り着いた。平原の向こう側に森らしきものが見える。

「やっと岩山がおわりましたね！」

アズトが本当に嬉しそうに言った。

「確かにやたら長かったな。まるで・・・」

ガルディアが何やら考えこんでいる。気になった俺は

「ん？どうしたんだ、ガルディア？何か気になることでも？」

「いやな、岩山がいくらなんでも長すぎたと思ってな。まるで、外部からの侵入を防ぐような・・・要塞みたいな島の構造だと思ってな。」

「ああ、なるほどな。言われてみれば確かに。あの岩山なら馬車は確実に使えないし、外から狙撃っていうのも難しそうだな。」

俺が同意すると、アズトが

「いよいよこの島に何か住んでいる可能性が少なくなってきましたね・・・この島から他の場所に移動するのに手間がかかりすぎますからね。」

若干落ち込んだように言う。

「まあ、まだあの森の奥とかに誰かいるかもしれないから諦めるには早いんじゃないか？光ったと思われる場所も見つかってないしな。」

少し可哀想になって俺は言った。アズトにしたらこのまま何も見つからずに手ぶらで帰ったら大損害だろうからな。まあ、まだ日にちもあるし、

とガルディアが

「おそらく大丈夫だとは思うが。祈祷師が指し示した場所の信憑性は高い。確実にこの島に何かはある。生き物もないような場所を指し示すというのは考えられない。」

今まで一切生き物を見ていないというのは確かに気になるが・・・」

「まあ、諦めるのは島内を隈無く探して何も無いと分かってからでいいんじゃないか？今はとにかく先にすすも」

そこまで言ったところで、俺は何かとても嫌な雰囲気を感じた。ので平原の半ばあたりを見てみると、いつの間にか見たこともない、銀色の物体が立っていた。それを見た瞬間ざわっ、と背筋が粟立つような感覚を覚えたので、

「みんなっ！伏せろっ！」  
俺は他のやつへ叫んだ。

〃〃〃

ソレは森の中から平原を挟んだ向こう側の様子を見ていた。岩山に何者かが入った途端感知可能な己のセンサーが感知したとおり、岩山を越えて侵入者が平原まで辿り着いていた。

数は五体。平原の距離は凡そ700m程度。己の侵入者排除機能の射程距離は500mはある。

常ならば平原を半ばまで進んで待ち構えておき侵入者が岩山を降りると同時に排除機能を使用する。だが今回は侵入者を感知してからここに辿り着くまでがいつもより遅いのか侵入者を視認したときは己はまだ森の中だった。

何かいつもと違う点があるか？一瞬そういう考えが己の回路にうかんだが、すぐにそれを打ち消し、自動で目標つまり侵入者が射程内にはいるように音もたてずに移動を開始した。

そして平原も半ばまで進んだソレは侵入者へ向けて排除機能を作動させた。

〃〃〃

俺の焦った声に何かを感じ取ったのか皆が一斉にその場に伏せた。と同時にその銀色の物体の銅あたりから青く光り輝くものが照射された。先ほどまで俺たちが立っていた高さの場所に。

伏せたおかげでその青い光は誰にも当たらなかったが、俺たちの後ろに立つ岩山に当たり岩の表面が抉れていた。

「い、今のはいったい？」

「伏せなかったら明らかに致命傷を負っていたぞ。」

アズトとガルディアが伏せながら話しているのを尻目に俺は銀色の物体へ向かって駆け出した。

距離がだいたい300～400mか。10秒ちょいぐらいはかかる。

～～

ソレは最初、己の認識機能に異常があるのかと思考した。かつて己の侵入者排除機能「イレイザー」を使用して斃れなかった侵入者などただの1体も存在しなかった。だが今、イレイザーを使用する直前に侵入者の5体はまるでイレイザーが当たる位置を知っていたかのように地に伏せかわした。それどころかその内の1体は凄まじい速さで此方へ近づいてくる。

己の義務を果たすため、ソレは再度イレイザーを放った。その近づいてくる1体へ向けて。

～～

丸太を2つ立てて、縦に繋ぎ（太さは丸太よりは一回り太いぐらい）それより細い棒を人というところの手や足の位置に生やしたような感じの形の（長さは丸太1mずつぐらい手足の位置にある棒は70～80？）銀色の物体が此方へ向けて先ほどのように青い光を照射しようとしている。

一気に走って距離は凡そ10mぐらいまで詰めたが走りながらじゃ回避が間に合いそうにないな、これは。

思った瞬間、光が再度照射された。

～～

煙が巻き上がり視認が不可能だが、この至近距離からのイレイザーなら確実に捉えた、と判断しさらに他の4体を排除するためにソレ

は岩山のほうへ進んだ。

否、進もうとした。

だが、

近づいてきていた1体が先ほどと変わらぬ姿でそこに立っていた。  
そして己がその姿を視認した瞬間、その1体が一気に己の頭上まで  
跳んで近づくと同時にそれまで腰に差していた金属を振り下ろした。  
その瞬間ソレは思考する機能を失った。

〃〃〃

オーラの使い方には大別して2つある。

1つは自らの体内から練り上げたオーラを使い、身体の筋肉や神経、  
手持ちの武器防具を強化し攻撃力や防御力、速さ等、威力を底上げ  
する方法（体気術と呼ばれている）

もう1つは、自らの体内から練り上げたオーラと大気中に浮遊して  
いる精気（プラーナと言われるもの）を混ぜ合わせ、自らのオーラ  
のみよりも強大な威力を発揮できる方法がある（大気術と呼ばれて  
いる）

俺は銀色の光の照射が此方へ当たる直前に大気中の精気と自らのオ  
ーラを混ぜ合わせた大気術を使い身体の防御力を大幅に上げたため、  
光の直撃を受けても特にダメージはなかった。

さすがに自分のオーラだけで受けてたら立ってられなかったかもな。  
それにしても・・・

「それは一体何なんでしょうね？見たところ大きな金属の塊にしか見えませんが・・・」

と、いきなり攻撃してきた銀色を倒した後、安全を確認して後ろに居た他のやつを呼び寄せ、考え事をしながら来るのを待っていた俺に追いついたアズトが尋ねてきた。

「ああ。俺も遠目には変わった生き物が居るぐらいにしか思っ  
てなかったが、近くで見ると・・・何だこれ？真っ2つにしたが、血らしきもの出てないし。ガルディア、これが何なのか分からないか？」

俺は銀色を指しながら、同じように合流してきたガルディアに尋ねてみた。

「いや、レヴィアスでもこのようなものは見たことがない。ただ・・・」

「ただ、なんだ？」

「金属が動く、というのは見たことがある。」

「ふーん。これとは形が違うのか？」

「そうだ。まだ実用化の目処は立っていないが、自走式貨物車と呼ばれるものが現在研究されている」

「自走式貨物車？それを木じゃなくて金属で作るのか？」

「そうだ。木よりも頑丈で腐りにくいからな。ただ自走式ならでは馬力がある大きな動力装置を使う必要上、どうしても本体を巨大にしなくては作れない。そんな巨大な貨物車を何処にどうやって移動させるかというのが現在の課題だ。それにそこまで詳しいことは分からないが、仮に作れたとしても前後に移動する、という機構を組み込むぐらいが限界だろうと思う。

だから・・・」

「仮にこれが金属だとしたら、どういう仕組みでこの大きさで自走し、しかも攻撃までできるかというのはまったく分からないな・・・」

「そういうことだ。それにしても、トウヤ。」

探索者というのはやはり好奇心旺盛なのか、俺が真っ2つにした箇所を色々な角度から眺めたり触ったりしながら話していたガルディアが不意に俺を振り返って言った。

「なんだ。」

「やはりトウヤの強さはめっちゃだな。この金属は鉄ではないにしろそれに近い固さだぞ。それをこんな風に剣で綺麗に真っ2つにするとは・・・」

「そうか？そのぐらいの固さならネクも出来るぞ？なあ、ネク？」

俺の横にいつの間にか立っていたネクへ話を振ってみると、

「えっ？あ、ああ、うん。鉄ぐらいの固さだったら斬れるわよ。」



「だよな。通常でも鉄ぐらいは斬れるよな。」

この場合の通常とはオーラやプラーナを使わない状態のことを指す。すると、ガルディアが

「なんというか・・・火の大陸ではそれぐらいの剣術の腕は当たり前なのか？レヴィアスでいうと、騎士並みの実力だぞ。いや、騎士でも何人が斬鉄をできるか・・・」

鉄を斬ることを斬鉄っていうのか。そのままだな。一応補足しとくか。

「いや、火の大陸全部じゃないと思うぞ。俺たちの出身の村では剣術が盛んだったってだけだ。」

「いや、それにしてもその若さで・・・凄まじい腕だな・・・」

何かガルディアが落ち込んでいる。まあ実際俺の腕を目の当たりにしたからな。

「むっ？これは？」

と、ガルディアよりも念入りに銀色を調べていたアズトが何かを発見したような声を出した。

「どうした、アズト？何か見つかったのか？」

聞いてみると、

「ええ。全身銀色の金属なのにここだけ色が違うのでよく見ていたんですよ。」

と言って丸太の繋ぎめあたり、人でいうと丁度臍のあたりになるのか。

よく見てみると、そこには

「宝石？」

赤く輝く真つ2つになった宝石らしきものが埋め込まれていた。

〃〃〃

???

「守護者がやられただっ！」

「いえ、やられたかどうかは分かりません。正確には反応が途絶えたのです。」「反応？精石の反応か？」「はい。通常ならば精石の反応が途絶えるのは考えられない事態です。私もこの250年間の話を色々と知っておりますがそのようなことは初めて聞きました。」

「そうだな。確かに俺も初めて聞いた、反応が途絶えるなどと。」

「ですから考えられるのは、精石自体の効力が長年の酷使により切れたか、侵入者がこの島に入り守護者を倒し精石を壊した、という2つの可能性です。」

「前者は考えづらいな。口伝に因れば精石はプラーナを取り込み半永久的に使用可能らしいからな。だとすると、やはり・・・」

「侵入者ということになります。」

「しかしっ！あの守護者だぞ。そう簡単にやられるか？」

「分かりません。ただ、もし守護者すら倒せるような侵入者がすでに大平原あたりまで迫っていると・・・」

「ここまで来るのは、あと1日ってところか。あいつらはどうした？」

「あの2人はいつものように島内を散策してますよ。」

「またか・・・いつ帰ってくるかは、分からないよな・・・？」

「見当もつきません」

「はぁー！ー！ーっ」

「溜め息は女性が逃げますよ。」

「そこは女性が、じゃなくせて幸せが、にする配慮をしろっ！」

「それはともかくこの守りは手薄ですね」

「ああ。侵入者の目的は分からんが、守りを固めんな・・・」

「目的はほぼ間違いなくあれだと思いますが。」

「それは言うなっ！もしかすると違うかもしれないだろうが」

「・・・」

「分かった。あれが目的だと認めよう。だからその目をやめろっ！」

「あれだけは何としてでも護らなくてはなりませんからね。下らない現実逃避はやめてください。」

「お前は本当に厳しいな。ああ、分かってる。あれだけは何としてでも護るさ。」

「勿論私も護ります」

そこまで話すと2人は自分達が今居る神殿、その中央の祭壇で体長50？程度の光輝く獣がすやすや眠っているのを眺めた。

〃  
〃  
〃

## 第13話く柱く(前書き)

最近はどうも時間が取れずに投稿が遅くなりがちです。

### 第13話〈柱〉

クロカゲ家は元々護衛を生業としている。

アリナとユリナの父親は2人の娘が物心ついた時から同じように護衛の為の術を教えているが、双子とは言え生来持って生まれたものが違うのか、成長するに従いその2人の性格と共に能力、性質の違いがはっきりと表れ出した。例えばアリナの場合は運動神経が良く格闘も出来るがユリナはあまり良くなくあまり戦いには向いていない。アリナにはオーラの流れがよく見えないが、ユリナは自分のものも良く見える。などとわかりやすいところで例が挙げられる。鍛え方としては、父親は初めの頃こそ同じように教えてはいたもののお互いが出す結果に余りにも偏りがあるため、やり方を変えてそれぞれの特長を伸ばす方針にした。その長所つまり本人達にとって得意なことのみをやった。その結果、12歳になる頃には、アリナは格闘や何種類かの武器の使い方を、ユリナはオーラを利用するための基本的な下地が出来ていた。とは言えまだまだ、発展途上にある2人をさらに上達させるため、甘えを無くすため、あわよくばお互いに足りないものを身に付けさせるため、知り合いの家へ2人とも預けることにした。

預けるには理由があって、まずそこが心安い知り合いの家だということ、そしてその知り合いは退魔術という戦いや魔物退治に大きな対抗手段を持って生業としているからである。

リシナ・トゴウが預けられた2人の少女を現役退魔師である父親から面倒を見るように言いつけられて、自らの身に付けている術を教えたのにはそういう経緯があった。

〃  
〃  
〃

「ーしよう。ししよう。」

初めて二人の姉妹が家に弟子入りしに来た時のことを振り返りながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「なにかしら？」

リシナはアリナのほうへ向き直り尋ねた。

「うん。さっきからユリナが結構きつそうで・・・出発してからもうかれこれ2時間は歩きっぱなしじゃない？もうそろそろ・・・」

アリナが遠慮がちにユリナのほうを見ながら言う。

「そういえばそうね、ごめんなさい気づかなくて。なら、そろそろ休憩にしましょうか？お二方もそれでよろしでしょうか？」

アリナと少し顔色の悪いユリナへ声をかけ、さらに後ろから歩いてくるレヴィアス団の男性二人にも尋ねてみた。

「我々は、貴女のご判断にお任せします」

と一人が言うので、休憩を取ることにした。

「それにしても、何もない場所だね。ほんとにこの島に何かあるのかな？」

アリナが周りを見渡しながら言った。

「そうね。上陸する前に見た感じだと島の両端が見えないぐらい広かったから、相当な広さだと思うわ。4班に手分けして探すというのは正しい判断でしょう。アリナちゃんが言うように何もなければいけないわね。それに3日後には入口まで戻らないといけないから、あまり奥深くまでも進めないわね。」

私がそう言うと、

「・・・でも、生き物の気配もしない」  
多少体力が戻ったのかユリナが言った。

「そうね。それは私も思ったわ。いくらこんな道でも虫とか小動物が居てもおかしくはないわよね・・・」

私は、歩いてきた荒れ果てた道を見ながらそう言った。無人というのはともかく生き物一体いないというのは不自然、というより変だ。

まるで、

「・・・まるで結界が張ってあるみたい」

ユリナがそう言った。やっぱりそう思うわよね。そもそもトゴウ家の退魔術というのは、魔物を退治するよりもどちらかといえば不可視の物理結界を張り魔物を押しとどめたり封印したりするほうに本領を発揮する。なので、結界術や封印術の修行を重点的にすることになるため、自分でできるようになるのはもちろんのこと、他者が行った術も違和感を感じたりと結界が張ってあるかどうかが感覚的に分かるようになる。ただ、術者が己以外を排除する種類の結界を張っているなら、その場所は違和感どころではなく、前に進もうと思っても進めない程の圧力がある。ここまで何の違和感もなしに進めたから結界が張ってあるというのは考え難いけど、もしかしたら・・・

「・・・私たちが島に入ってから結界を張ったのかも・・・出られなくするため・・・」

「私もそれは考えたわ。でもそれだと、どうやって私たちが島に入った時が分かったのかしら」

私が、ユリナの考えに疑問を持つと、

「あのう、我々の砲撃音のせいではないでしょうか・・・」

と、現在私たちの班員である男性の1人がおずおずと言いだした。

ああ、そういうば・・・

「そうだよねー。おじさんたちが有無を言わず攻撃してきたもんね」

若干からかいの口調でアリナが答えた。

「ええまあ、あれはなんと言いますか・・・」

申し訳なさそうに男性が答える。

「そうですね。あの時結構大きな音がしましたね。いくらこの島が広いと言っても音が響いたかもしれませんね。ただ、あれはもう気になさらずとも良いのではないですか？結果的に皆無傷でしたし、やむを得ない事情がおりになったでしょうから。」

私が悪気なく微笑みながらそう言うのと、

「はあ、そう言ってもらえると助かります。」

と男性が言った。

「結局、おじさんたちのほうが被害が大きかったしねー。」

言わなくてもいいことをアリナが言った。

「ええ、貴女とそしてあの少年に完膚無きまでにやられました・・・」

男性が私を見ながら言った。いや、あの少年はともかく私はただ砲弾を防いだけなのですが・・・

「ま、まあ終わったことは気にせずにつ」

アリナが慌てたように言った。

「・・・でもあの子強かった・・・」

ユリナが思いだしたように言った。

「確かにそうだねー。あれで私たちと1つしか変わらないっていうんだから・・・」

若干へこんだようにアリナが言う。そこで私は、

「アリナちゃん、ユリナちゃん。人は人、自分は自分です。あの少年は確かに強いですが、貴女たちは気にせず自分の腕を磨いてください。もちろん私もまだまだ修行不足の身ですが。」

とりなすように二人へ言った。

「そうか、そうだよね師匠。修行頑張る！」

「・・・私も頑張る・・・」

と、男性が

「あれで修行不足と言われたら・・・」

「戦いが本業でないとはいえ我々は・・・」

二人して項垂れていた。

「まあねー。でもそれはしょうがないんじゃないかな。師匠の強さは化け物じみてるからね。だからこんなに美人なのに普通の男が怖がって恋人の一人もいないんだよねー。」

と、アリナが言ってくれやがったので私は



「アリナちゃん？あとでお話があるのだけどいいかしら？」

アリナへ微笑みながら言った。

「ヒイツ。ご、ご、ごめんなさい師匠。」

何故かアリナが私の方を見て怯えていた。

「まあ、ユリナちゃんも元気になったことだしそろそろ休憩を終えましょうか？」

「「「ハイツ！」」」

私がそう言うのと全員が一斉に返事をした。何故？

立ち上がり、また荒れ果てた道を進もうとしたその時、突風が吹いた。

くくく

リシナ達から約1？離れた場所に1人の男が立っており、その男は目を細めながらリシナ達のほうを見ていた。

「大きな音がするんでわざわざここまで様子を見にきてみれば、1、2、・・・5人か。久しぶりの客だ。精々もてなしてやるとするか。」

そう言って男はリシナ達のほうへ向けて飛ぶような凄まじい早さで飛んだ。

くくく

一瞬巻き起こった突風でよろけて目を瞑っていた私が目を開けたらいきなり目の前に見知らぬ男が立っていた。

赤い髪が大きく屈強そうなその男は私たち全員を見ると、

「ようこそ火喰い島へ、侵入者よ。歓迎するぞ。」

と言った。この口ぶりだとこの住民でしょうね。  
ただ、そんなことよりも・・・「ん？どうした侵入者どもよ。珍しいものを見るような顔をして？」

その赤い髪の男はそう言った。それはそうだろう。つい先ほどまで  
気配すら感じなかったし、その男の額には・・・

「ああ、ひょっとしてこの角が珍しいのか？」

と、男は自らの額にある角らしきものを指してそう言った。

「亜人・・・？」

アリナがそう言うのと、

「はっ！人間ってのはどいつもこいつも同じ反応をするな。確かに俺たちは貴様らからすれば亜人と呼ばれる存在だろうよ。いや、何十年前の侵入者は鬼とか呼んでいたっけなあ。」

男は私たちを蔑むように見ながらそう言った。

「何十年前前？ということとはやはり以前にも誰かこの島、火喰い島と言ったかしら、に来ていたと言うわけね・・・」

私がそう言うと、男は

「ああ、来てたぜ。もったも、骨すら残っちゃいないがな。」

と言った。

その言葉に全員が警戒し、身構えた。さらに、

「まあ、その時の奴等の目的が亜人を捕まえて売り飛ばすとかいうふざけたものだったからな。何の躊躇いもなく消してやった。どうせ貴様らもそんなところだろう？」

男が言うと、レヴィアスの男性の1人が、

「違うっ！我々の目的は神獣だっ！この島に神獣の居る可能性が高いのでやって来たただけだっ！」

慌てたようにそう言った。すると、

「なんだとっ？成程な。どうやってアレの存在を嗅ぎ付けたかは知らんが尚更生かして帰すわけにはいかなかったな。」

そう言うと、男は両手を前に突き出した。

「アレ？ということは、この島には神獣が居るん」

レヴィアスの男性がそこまで言ったところで、数十m後ろに吹き飛んだ。

「えっ・・・？」

それを見た全員が驚きで固まっている。

「ふん、脆弱だな。」

男がそう言うと、アリナが

「な、何今の？」

と言った。男は、合点したように

「ああ。そういやそうだな。人間たちの中では廃れたらしいが今の魔法ってやつだ。俺は親切だからな。自分がどうい風死ぬのかぐらひは教えといてやるよ」

私たちへ説明した。今、有無を言わず吹っ飛ばしたけど・・・

「魔法？ 廃れた？ その言い方だと人間でも以前は魔法を使ってたみたいね？」

私がそう言うと、

「ああ、そうだ。今もその名残があるじゃないか。人間の村に張ってある結界とかな。」

「結界？ あれを魔法というの？ 昔に妖術師と呼ばれる人たちが使った術を？」

「呼び方は知らん。だが250年ぐらひ前に来た奴等は確かに強力な魔法を使っていたぞ。」

「250年前？ その時に誰か来ていたの？ それに貴方はいったい何歳なの？」

「俺はまだ精々300歳ぐらひだが。誰が来ていたかは貴様らのほうがよく知ってるんじゃないか？」

「っ！スサノオ。ということは・・・」

「まあ、そんなことはどうでもいい。貴様らは消すだけだからな。」

「待って、まだ聞きたいことが。」

「お喋りはここまでだ。どうせ貴様らはここで消える。あと、最後に教えてやろう。俺の名はロナン・サタク。火喰い島4柱<sup>ちゅう</sup>が1人口ナン・サタクだ。この名を頭に刻み込んで・・・死ねっ！」

男が再び両手を前に突き出した。

## 第14話 風

~~~~~

火喰い島（大陸の者や人間には鬼ヶ島と呼ばれているらしい）は、その全長が数十？ありその道の険しさと合わせて島内を全て歩こうと思えば数日はかかる。並みの人間や動物ならば・・・自分は生まれて物心ついた時からずっとこの島に居り、他の場所がどのような様子なのか知らないということもあるが、広いこの島から出る必要も外との交流も必要もないと考えている。ただ此方がそう思っている外からは数十年に何回かは侵入者がやってくる主に人間だ。どういう理由でこの島へ来るのか、例えばこの島を自らの領地にしたのか、亜人と呼ばれる我々を捕まえたいのかは不明だが友好的な者は1人として居ない。それに外から来る人間はどれもいつも皆弱い。唯一の例外を除いてはだが。

そんな今までの経験から、ロナン・サタクは侵入者を見つけたとき、いつもするようにすぐさま排除しようと決めた。暇潰しに多少は話してみたが、やはり侵入者の目的が録なものではないということもあり特に躊躇いもなかった。あいつらには後で結果の報告だけしとけばいいと、島の中央部に居る者たちを思い浮かべて、自らの風魔法を放って1人を吹き飛ばした。死んだかどうか分からないがおそらく致命傷だろう。続いて残った奴等へもまとめて同じ魔法を放った。

~~~~~目の前のロナンと名乗った男が両手を前にかざしたとき、私は無意識に物理障壁を展開していた。見えない攻撃・・・先ほど男

性が飛ばされたことを考えればおそらく物理的な圧力があったのだとは推察できたので、選択としては間違いないと思う。

ゴオオオー

風が吹くような音が耳に響く。

魔法？と言っていたが、いったい？この障壁にかかる圧力がその魔法というもののなのか。するとロナンが私と私の物理障壁を見ながら

「ほう。疾風はやてを防ぐとはな・・・貴様も魔法使いか？」

「疾風はやて？それが魔法の名前ということなの？魔法を使った覚えはないのだけれど」

私はその物理的な圧力を障壁で抑えながらそう言った。が、

「そうだ。だがっ！」

と言うとロナンの両腕がさらに力を入れたのか膨れ上がり圧力が明らかに強くなった。

「くっ、押しきられるっ！」

すると横からユリナが、

「・・・手伝う」

と、同じ物理障壁を展開させ此方の方が優勢になる。

「もう1人だどっ？ばかな？貴様らは何者だ？」

ロナンが驚いて言う。

「何者と言われてもね。ただ退魔術を使う退魔師ってだけよ」

今度はアリナがそう言いながら弓を構えた。

「退魔師だと？聞いたこともないぞそんな奴等は。だが俺の魔法を防いでいるのは紛れもない事実。魔法の一種では、グハァ！」

「へへ。どう？退魔術式弓術の威力は」

アリナの障壁の此方側から放った矢がロナンの右太もも当たりに突き刺さっている。だけど・・・

実際、退魔術式弓術の破壊力は岩も砕くぐらいある。それは、プラーナと呼ばれる大気中の精気を弓矢に取り入れ弓矢自体の強化、矢の速度を上げるのに利用される。アリナは未だ結界を張ったり障壁を展開させることは出来ないがその代わり武器等の身の回りの物にプラーナを纏わせたり格闘の際に自らの身体の強化をすることができる。それにしても2人分の結界を貫いた上にさらにあの風の中を通すなんて、そんなに威力があったのかしら。

「さ、3人だと。き、貴様ら全員魔法使いかつ！全員？侵入者は五匹居たはずだっ！」

先ほどのまでの余裕が消えたロナンが焦って周りを見回すと、

パン

音がした。

「グアアッ！」



ロナンが急に右腕を押さえて痛がりだした。

見るといつの間にかレヴィアスの男性がロナンの右側5mぐらいのところにたっており銃を構えていた。

「グッ。何だこれは。貴様がやったのか？今何をした？」

ロナンが腕を押さえて男性のほうを睨みながらそう言った。  
男性は、

「どうやら亜人とはいえ銃は通じるようだな。今度は決めさせてもらおうっ！」

そう言って再度引き金を引いた。だが・・・

「ハアッ！」

銃弾はロナンの手前で一瞬止まり地面に落ちた。

「なっ！くそっ！」

それを見て焦った男性は再度引き金を引いたがまたしてもロナンに当たらず地面に落ちた。

「俺に鎧風がいふうを使わせるとはな・・・だがここまでっ？グアッ！？」

再度、アリナが矢を放ちロナンの左肩辺りを掠めた。

「あれ？外したっ？」

アリナがそう言うのとロナンが、

「鎧風<sup>がいふう</sup>を貫くだどっ？ いったい何なんだ貴様らっ！？」

何故か怯えたように私たちのほうを見た。

「だから、あのオジサンはともかく私たちは退魔師って言ってるじゃない」

アリナが若干呆れたように言う。

「くっ。退魔師かなんだか知らんが此方の分が悪い。追い風っ！」

と、ロナンが叫ぶと、どこからともなく突風が吹いた。一瞬目が開けられず、

アリナが

「きゃっ！あ、あれ？」

と言ったので、目を開けてみると、そこには

「あいつは何処に？」

男性が言うようにロナンの姿がどこにも無かった。

成る程。私は合点したように、男性へ

「おそらくですが、私たちに倒されそうになったため魔法とやらを使ってこの場所から逃げたのでしょうか。」

「ということは我々はあの亜人を退けたのですねっ！」

助かったと言いながら男性は安堵していた。そして

「そうだっ！あいつを」

と言いながら飛ばされた男性のほうへ駆け寄っていった。私はそれを見ながら、

「大丈夫かしら？」

と呟き、

「師匠が居るから何とかなるでしょ」

「・・・師匠が居るから大丈夫」

アリナとユリナがそんなことを言った。まあ確かに退魔術には怪我をしたときの為に治癒をする技もあるのだからそのとおりなんだけど・・・それにしても、

「アリナちゃん？」

「ん？何、師匠？」

「貴女はいつあんなに腕を上げたの？矢で障壁を突破する破壊力なんて以前はなかったでしょう？」

「うーん、私もまさかあれほど威力があるとは思ってなかったんだよね。ただ、矢にプラーナを溜めるとき何時もより遥かに精気が集まっていくなのは感じたよ？」

「そう。何となく分かったような気がするわ。」

そう言われてみれば私もユリナちゃんも何時もより大分障壁の展開

が早かった。だとすればおそらく、

「えっ？　どういうこと？」

「多分だけどね。この島には大陸よりも遥かに濃いプラーナが大気に漂っているの。だから私たちみたいなプラーナを利用する退魔師は何時もより強大な力を発揮できるというわけ」

そう言うと、2人は納得したような顔をしていた。

と、もう1人の様子を見に行った男性が、

「大丈夫ですっ！　こいつは所々怪我をしていますが気絶しているだけですっ！」

向こうのほうから此方へ大声で叫んだ。

「よかった。じゃあ行きましょうか。」

私は2人へ促すと男性が居るほうへ歩いていった。

~~~~~「くそっ！　人間風情がっ！」

ロナンは風の魔法を使って飛んで移動しながら悪態をついていた、時速約200kmぐらいで。

今まで侵入者、それも人間にここまでの手傷を負わされたことなどなかったから急いであの場所から離れた。だが・・・

「いったい退魔師とはなんだっ？　何故人間が魔法じみたものを使える？」

自問しても、知らないことが分かるはずもない。そもそも脆弱で戦う術もないものが人間だ。我々のように亜人と蔑まれながらも、人間ではもちえない能力もないのに、あそこまで強いのが信じられない。

「どちらにせよ一度戻って報告する必要があるな・・・」

そう考えるとロナンは憂鬱になった。傷を治す必要もあり侵入者の目的も話さねばなるまいが・・・この傷を見てあいつらは小言を言うだろうな。独断で行動するとか油断したバカ者とか。ただ、あいつらは間違いなく強い。下手をすればあいつよりも・・・今もおそらく自分のように島の何処かに独断で彷徨っている仲間の顔を思い浮かべ、首を振った。まさかな、あいつは我々の種族の中でも飛び抜けて魔力が高い。それはないか。

そこまで考えたところで

島の中央部が見えてきた。

~~~~~

その男は魔力を感じる能力を持っていた。だから自分の仲間の1人が自分の居るここから島の反対側辺りで、おそらく侵入者であろう者たちと交戦していたのは分かっていた。だが、

「・・・おかしいな。ロナンのやつは何故帰ったんだ？」

思わず呟いていた。何故なら侵入者らしき3つの魔力がそのままその場所に残っているのに、好戦的な仲間であるロナンがそれを残して帰るなど何時もなら考えられないからだ。

「逃げ帰ったか？」

多分それしか考えられない。そんなにあの侵入者は強いのか。それに・・・

「もう1つのほうも気になるな」

先ほどロナンが居たのとは別の場所で一瞬だが凄まじい魔力を感じた気がしたのだが。まあ、あの辺りは守護者の範囲内なので、仮に侵入者が居ても守護者に排除されたとは思うが・・・  
男はそこまで考えると、前方に気配を感じた。

〃〃〃

「レンジさん。漸くそれっぽいものがありましたよっ！」

リクオが前方を見て、弾んだような声を出したので見てみると、そこには木で出来た巨大な門があった。

「ほお。でかいな。」

「いや、感想がそれだけですか？レンジさん。あれは明らかに建造物ですよ。つまりこの島には何者かが確実に居るということでしょうっ！」

リクオがやたら興奮していた。まあ、島の入り口から四時間ぐらい歩きっぱなしだったからな。何もなさすぎて心がおれそうだったんだろう。分らないではないが、

「まあ、落ち着けリクオ。まだ住民が見つかったわけでもないだろう、なあ？」

おれは後ろについて来ているレヴィアスの3人へ言った。だが、

「おお」

「これは・・・」

「やはり神獣はこの島に・・・」

3人はリクオと同じように前方の門を見てそれぞれ感嘆の声を漏らしていた。

俺は苦笑して、

「お前らなあ。仮にも探索団だろ？　こういうのは大して珍しくもないのじゃないか？」

と言うと、1人が

「そうは言いますがレンジ殿。我々はどういった未知なるものを発見するという行為のためにこの仕事をしているのですよ。それに、門があるということはこの先にこの島の住民の集落がある筈です。ここまでくれば一気に神獣に近づいたと言っても過言ではありませんん。」

リクオと同じく興奮した様子で言った。

ちなみに俺たちは歩きながら話しているので先ほどは遠くに見えた門まであと数mというところまでできていた。

「まあ、そうだけだな。でも結局神獣が見つからなければ、それもその時その巨大な門の陰から1人の男がのそりと出てきた。そして、

「ようこそ、侵入者の諸君」

と言った。その姿を見て

「な、何者だっ！」

トリクオが言う。若干怯えたような声なのはその男の姿によるものだろう。なにせその男は・・・

「ほう。中々度胸があるな、人間よ。以前見た侵入者は私の姿を見ただけで怯えて声もだせなかったがな」

見た目は、顔こそ赤茶けた髪を立てた火の大陸の者とそこまで違わない造詣だが、体は二mを越える大男で体は筋骨隆々なのに妙に落ち着いた口調で話しかけてくる。・・・何よりその額からは二本の角が生えている。その姿はまるで伝承にある、

「お、鬼かつ!？」

再度トリクオがそう言う

「ふふっ。面白いものだ。侵入者はいつも私の姿を見てそう言う。それが亜人とな」

その男が微笑みながらそう言った。

「違うのか？」

俺がそう言うと、

「まあ、間違っ**て**はいない。我等は鬼族と名乗**っ**ている。呼び方は好きにすればいい。今後の付き合いをどうするかは今からの展開次第だ**な**。」



「今からの展開次第？　どういうことだ？」

「簡単だ。諸君らのこの島に来た目的次第ということだよ。もし、我々と友好を結びに来た、というなら歓迎しよう。だがそうでなかった場合・・・」

「なんだ？」

言い淀んだので俺が聞くと、

「ここで全員死んでもらうことになるな」

と言って此方を鋭い目で睨んできた。

その瞬間リクオをはじめ他の3人も驚愕で固まった。おれは、

「死んでもらう、とは穏やかじゃないな」

「まあ、気にすることはない。例えば今までこの島にやって来た侵入者の目的は大抵我等を捕まえるだとか、この島を自らの陣地にしようとか、おろかにも自分の弱さを理解していないようなものばかりだったからな。諸君もそうならば、という話だ」

穏やかな口調で話しながらも此方を睨みプレッシャーをかけてくる。

「いや、俺達の目的は神獣探しだ。そういったことじゃない」

と、俺が言うと男は僅かに目を見開き、

「神獣とはな・・・やはり人間の中にも魔力を感じ取れる者が居る

ようだな。だが、何故神獣を求める？あれは我等にとっては必要だが諸君ら人間にとって不必要なチカラだと思うが」

この男の口ぶりだと神獣が居るのは間違いないな。

「ああ確かに。俺は、というより火の大陸には別に必要ないな。ただの調査だ。だが、」

と後ろの3人を見ながら、

「この水の大陸の奴等にはどうしても必要らしい。というのも・・・」

俺は目の前にいる男に、ガルディアから聞いた水の大陸の状況を聞かせてやった。さすがに驚いたようで、

「一晩で国が消滅しただと。そんなことが・・・もしや・・・」

「心当たりがあるのか？」

「あ、ああ。さすがにそんな真似ができる存在は限られている。だが目的が分からん。」

「知っているやつなのか？」

「知っていると言えば知っている。我々からすれば雲の上の存在だ。太古の昔から存在しているお方だ」

「太古の昔？御伽話みたいだな。」

「そうだな。私は精々500年ぐらいしか生きていないがそのお方は少なくとも数万年前から存在しているはずだ。」

「何者だ。そいつは？」

「我等鬼族を創造した、とされているお方だ。」

「創造？それはまるで神様みたいだな・・・」

「ある意味では間違っていない。そのお方は魔神と呼ばれている」

「魔神？」

「そうだ、そして創造主であると同時に我等の始祖だとも言われている」

「つまり、あんたら鬼族の産みの親でしかもご先祖ってことか・・・」

「ああ。だが伝え聞いた話に困ればあのお方は此処より遙か彼方の大陸に居られるはずだ。それにわざわざ国を潰す目的が」

目の前の男がそこまで言ったとき、生暖かい風が吹き周りが見えなくなった。

そして、

「何のお話をしてたのかしら？私にも聞かせて頂戴」

声のしたほうを見てみると銀色の杖を持ち、黒いローブを着た小柄な少女が立っていた。

## 第14話く風く（後書き）

ご意見ご感想等あればお待ちしております。

## 第15話〈少女〉

〃  
〃  
〃

鬼族<sup>きぞく</sup>である自分は生まれつき魔力が高い。それに加えて他の仲間にはない能力、すなわち他者や自分の魔力の内包量を見ただけで分かる、離れていても誰の魔力かも分かるという能力を持っている。その能力を使い仲間同士で誰が一番高い魔力を持っているかを調べてみたら・・・私だった。

勿論、戦いの優劣や立場の序列などは魔力のみで決まるわけではない、が鬼族の中でも最も魔力が高いということを私は誇りに思っている。また、知能も高いと自負している。現在、島の中央で神獣を見守っている4柱の中でも神官という立場としては私より上の奴にも私に指図することはできないため、私は島内で自由に行動している。侵入者の生殺与奪も私の気分次第だ。（もっともロナンの奴も自由に行動しているが）

今日は数十年ぶりに侵入者（おそらく人間のものであるう魔力）の気配を感じ、軽い期待を込めて島の正面入り口から比較的侵入しやすいと思われる、島のとある集落の門の陰で待っていた。すると予想どおりに5人の人間がやってきた。（ただ、島の数か所でも侵入者の魔力は感じるのでどこで待っていても同じ結果だったとは考えられる）

私は別にわざわざ戦う必要のない相手と戦いたがる戦闘狂というわけではないので、久々に出会う人間の侵入者との会話を少し楽しんでいた。

だが、話をするうちにどうもおかしなところがいくつか出てきた。神獣を探しにやってきたと言われたときは人間に扱えるチカラでは

ないが、まあ長い年月が経てばそんなことを考えることもあるだろうなと軽く考えていたが、何故神獣を求めるかその目的そこに至るまでの経緯を聞いたとき私は今まで生きてきた中で一番驚いたのではないかと思う。

何故なら、私は確かに魔力が高いほうではあるし、それによって様々な強力な魔法も使うことができる。しかし、聞いた話の中でウォルス王国という1つの小国をたったの1晩で滅ぼすほどの強さはない。(やろうと思えばおそらく数ヵ月はかかるだろう) 私にも無理なことなのでこの島に居る仲間の誰でも間違はなく無理だとも断言できる。そんなことができるのはせいぜい、失われた魔法、ロストマジックと呼ばれる閼属性の魔法が使える者ぐらいだ。ただ、その閼属性の魔法の使い手というのは私の知る限り1人しか居ない。いや、居なかった。そのお方は現在、といっても300年ぐらい前に聞いた話だが遠くの場所ですう簡単には移動できない状態にあるはずだ。我々の中では創造主、始祖、など敬意を込めて呼ばれ、人間達の間では魔神と呼ばれて畏怖されているそのお方であるはずがない。だから、数日前にそのような強大なチカラを持つ存在がここからそう遠くない水の大陸に出現したことが俄かには信じられない。

私が侵入者の人間と話しながらそう考えていると、突然目の前に少女が現れた。

銀色に輝く杖と絶大な魔力を携えて・・・

〃  
〃  
〃

「ねえ。私にも聞かせて頂戴、その面白そうな話。」

俺が目の中の鬼族の男と話しているとどこからともなく黒いローブを纏った少女が現れ、此方に話しかけてきた。声や口調こそその見

た目通り少女のようだが・・・

「おい、お嬢ちゃん・・・あんたは何者だ・・・いつ、どうやってここに来た」

見た目にはそぐわないその少女から放たれる圧倒的なプレッシャーに俺はその場に倒れそうになりながら尋ねた。

「へえ。貴方は結構強いよね。私を目の前にして気絶すらしないなんて」

少女は微笑んでそう言った。というのも俺以外のリクオやレヴィアスの奴らは少女が現れたときに気絶していたからだ。

「ああ・・・あんたがとんでもなく強い化け物っていうのは何となく分かるぜ・・・あんたも鬼族なのか？」

「化け物とはひどいわね。でもそうね。貴方の言っていることは間違いないわ。私は鬼族といえば鬼族になるわね。」

と言いながら、その少女は被っていたフードを脱いだ。そこには、火の大陸の者特有の黒髪黒眼ではなく金色の髪に碧い眼をした異常に肌の白い小さな顔があった。しかもその額には鬼族のような角が生えていた。

すると先ほどまで話していた鬼族の男が、怯えながらそれでも納得がいかないように、

「バカなっ！私は500年この島に住んでいるし、仲間の存在も全て把握しているが貴女のような方は見たこともないぞっ！」

と言った。どういふことだ？この少女は鬼族ではないのか？  
すると少女が、

「ふふふ。それはそうよね。坊やはまだ500歳程度ですもんね。  
私がこの島に居たのは少なくとも2000年以上は前なのよ。もっ  
とも正確には今の100歳程度の私じゃなくてかつての私という意  
味だけれど」

このお嬢ちゃんはいったい何を言っている・・・？  
確かに鬼族というのは人間に比べて遥かに長寿らしいが、自分で今  
100歳程度と言ったぞ。それなのに2000年以上前にこの島に  
居た？意味が全くわからんぞ。

俺が頭を悩ませていると鬼族の男が、

「なっ！？もしや貴女は・・・いや、そんな筈は・・・だが・・・」

何かを言おうとして躊躇っていた。  
すると少女が、

「貴方が何を考えているかは大体分かるわ。まあ、この姿ですもの  
ね。金髪に碧眼それに幼い。確かにすぐ信じられないのも無理はな  
いわ。でも貴方が今考えている通り、私が貴方達鬼族の創造主よ」

！！！！？

「そうね、私は少なくとも数万歳のお婆ちゃんの筈ですものね。信  
じられないというのはよく分かるわ。でもね、闇の魔法には色々と  
禁断の術があるの。」



「あ、貴女は本当に創造主様なのですか？」

「そうよ。でも、もっと正確に言うのなら以前の肉体が消滅して闇の大陸に居たこの子の身体に転生したのが私、鬼族の創造者、デユカ・リーナなの。」

「転生・・・」

「そう。転生。まあ、以前の身体が消滅したのは闇の大陸でちよつとした出来事があったからなのだけれどね」

「伝説のデユカ・リーナさま・・・た、確かにその魔力を見ればそんな気もしますが・・・」

俺は、気になるところが多々あったので

「まてっ！ということは、お嬢ちゃんも魔物の生まれ変わりなのか？それにこいつが魔力とやらなのか？この凄まじいプレッシャーがっ！？」

「成る程。プレッシャーね。魔力を扱えないモノは意外と分かりやすい言葉に置き換えるものなのね。」

俺が言うのとデユカ・リーナと名乗った少女が1人で納得していた。さらに、

「また魔物か。貴方達人間には何時の時代にもそう言われてきたわね。あとは鬼とかね。でもほんとうは・・・」

寂しそうにそう言い、続けた。

「それで、先ほどの話に戻るのだけれど、私は少ししか聴いていないの。だから坊や、よかったら何を話してたのか教えてくれないかしら？もしかしたら力になれるかもしれないわよ」

鬼族の男に先ほどの話をせがんだ。何故気にするのかは分からないが。

「ハイッ、分かりました。そ、それと坊やはやめていただけないでしようかつ！」

「ああ、御免なさいね。鬼族は全て自分の子どもぐらいに思ってるから・・・貴方、御名前は？」

「ハイッ。私は火喰い島4柱ちゅうが1人、ジン・ガトウと申しますっ」

「4柱？っていうのはよく分からないけれど・・・名前はジン・ガトウね、分かったわ。じゃあ、貴方が現在の守護者になるのかしら？」

「いえ。そういうわけではありません。我等4柱はそれよりももっと大きな役割があります。主に島内の治安を護り、神獣を護る鬼族の最高幹部であり、この島全体を色々な面で治めています。守護者の役割のほうは精氣兵プラーナマシンに任せておりますので侵入者程度ならあれ一体あれば十分でしょう」

「ふうん？それは今何処に置いてあるのかしらね？あれが持っているプラーナを探って見たのだけれど見つからないわ・・・まあ、そのうち分かるでしょう。それよりも、」

「あ、はい。先ほどの話ですね。――――」

この鬼族2人の話をばーっと聞きながら俺は今からどうするかを考えていた。

何しろ他の奴はまだ皆気絶しているので逃げることもできないし、この2人と戦って勝つのは間違いなく無理だろう。かといって神獣を探しに島に侵入してきた俺達をこのまま見過ごすとも思えない。どうするか……

そして、先ほど俺が説明した話を男が少女に伝え終えたのか、

「成る程ね。それでこの島に大勢やって来たというわけね。レヴィアス国の人間か……ねえ、人間の貴方？」

少女が俺に話しかけてきた。

「……なんだ？」

「貴方はおそらく火の大陸の人間だからわかるでしょう？この島にレヴィアタンが存在しないことを。それをレヴィアス国の人間達は知っているの？」

と言うので、俺は先ほど話してなかった、俺達とレヴィアスの奴等が手を組むに至った経緯を説明してやった。すると、

「へえ。人間にも変わった術を使う者がいるのね。ちょっと見てみたいわ。」

あ、でもそう言えば昔も結構変わった術を使う人間も居たのよ。まあ、レヴィアスの人間達は運が悪かったわね。いや、良かったのか

しらね？結果的に強力な仲間が増えたのだから」

少女はそう言った。

俺は、

「いや、運は悪かっただろうさ。何せ俺が聞いたことのある伝承通りならば間違いない目的の神獣はこの島には居ないからな。結構無駄な時間を使わせられるぞ。本人達は納得していたみたいだが・・・」

「ふうん。ということは貴方はこの島に居る神獣が何か知っているわけね？」

「ああ。お伽噺みたいなもんだが、聞いたことはある。神獣フェニックスだろう？不死の神獣フェニックス」

「そうね。それは正しいのだけれど、何故急に神獣が現れたと思う？」

「急に現れた？いや、それよりもその口ぶりは神獣フェニックスが本当にこの島に居ると言っているようなもんだぞ。何故それを俺に言う？」

「ええ。言っておくけれどフェニックスは間違いなくこの島に居るわ。今はまだ幼獣だけれどね。そもそも私が約2000年ぶりにこの島に戻った目的がそれだもの。何故教えるか、というのはせめてものお詫びよ」

「そうか。一目見てその姿さえ確認出来れば俺達はすぐにでも立ち去るが・・・一つ気になったがお詫びとはなんだ？」

「ああ。簡単なことよ。私のせいでレヴィアスの人間、つまり水の大陸の人間に余計な心配をさせ無駄な時間を取らせてしまったからそれを聞いてもよく意味が分からなかった。が、この少女の言葉の意味をよく考えてみると・・・

！？

俺は一つの答えにたどり着き、そして、

「ま、まさかお前が・・・？」

「そう。つまり私がウォルスを一晩で消滅させたモノの正体、というわけ」

驚愕した。

「な、何故？」

「何故消滅させたか、ということ？ そうね。一言で言えば邪魔だったからよ。私の目的のために」

「も、目的だと？ さっき言ってたフェニックスが目的というのは？」

「まあ、この島に戻った目的もウォルスを消滅させた目的も同じではあるのだけれど・・・」

「同じ目的・・・」

「まあ、その目的自体は貴方たちには関係ないと思うわよ。辿り着

けば別だけれど」

「辿り着く？　どういうことだ？」

「此方の話よ。まあ、それは特に気にしないでいいわ。本当に辿り着けるのなら自ずと分かることでしょうから。」

「自ずと分かる？　いったい何を言っている・・・？」

「そうね。今はまだ私が何を言っているかは分からないでしょうね。でも・・・」

「なんだ？」

「・・・いえ、なんでもないわ。まあ兎に角、其処の寝ている人間達にも、この島に来ている貴方のお仲間の人間達にも神獣を手に入れるのは諦めるように言っておいて頂戴。」

「ああ。それは構わない。そもそも俺達の目的はこの島に見えた光り輝くモノの調査だっただけだ。それに仮に神獣を持って帰ってもどう扱えばいいのかも分からないしな」

「そう。聞き分けがいいのね・・・」

少女は少し残念そうに言い、

「・・・この人間は違うのかしら・・・？」

と、何やら1人ごとを言っている。

その時、遠くのほうからなにやら話し声らしきものが聞こえた。

〃  
〃  
〃

俺達は銀色を倒したあと、奥に見えた森に入りしばらく進んでいた。さすがに岩山の道ほど険しくはなく、進みやすい道だったが、この森がまたやたらと長かった。それでも二時間も歩いただろうか、漸く森の切れ目みたいな場所に出た。そして、

「見て下さいみなさんっ！あれは門じゃないでしょうか？」

アズトが興奮したようにそう言ったので前方を見ると巨大な門が見えた。だがさらに近づいてみると、俺は門とは別に気になるモノも見えていた。

「ねえ、あれって人が倒れてない？」

ネクも見つけたのだろう、100mぐらい先の門の辺りには人らしき倒れている奴が何人か見える。立っているやつも。

「あれは・・・レンジさんの班では？」

アズトが言う。確かに今立っている3人の人物のうち1人は長い槍を持っている。あれがレンジだろう。だが、

「あの小柄な人と大きな人は誰なんでしょうか？」

ま、まさか鬼族っ!？」

俺と同じ疑問をアズトが言った。喋りながら少し早足で俺達は門へ近づいており、あと十数mまで近づいたとき漸くその人物達の顔が視認できる距離となった。

・・・やはりレンジの班の連中だった。だがレンジ以外の4人は皆倒れている。俺達の話し声が聞こえたのか立っている3人は皆此方を向いていた。

妙に顔色が悪いレンジに、おそらく鬼と呼ばれる所以だろう、額から二本の角が生えたやたら大きな男と、額から一本の角が生えた金色の髪の小柄な少女が其処にはいた。

と、誰かがその3人に向かって物凄い勢いで駆け出した。ミシルだ。あの鎧来てあの早さとは凄いな、と見ていると、

「ウオオオオオオーツ！」

ミシルが叫びながら背中から抜いた大剣にオーラを纏わせて、小柄な少女に斬りかかった。



## 第15話〈少女〉（後書き）

ご意見感想あればお願いします。

## 第16話（理由）

（ （ （

ガルディアは現在眼前で繰り広げられている光景を見ながら数年前のことを思い出していた。

数年前ウォルス王国を訪問した際に錬兵場で見せてもらったような技を見れば、やはりあのミシルという男が持っていたのはウォルス王国の騎士が扱うバスタードソードだったと思える。ということはミシルという男は必然的にウォルス王国の騎士・・・だったと言えることができる。

というのも、あのミシルという男が今繰り出している剣技は剣の扱いに素人である自分から見てもバスタードソードという大剣を使うことを前提とした剣技だからだ。

ウォルス王国の騎士が使うつまりバスタードソードを使うことを前提とした剣技とは、剛剣技ごうけんぎと言い主に対戦する相手の装備する武器や鎧を破壊する事を目的とし、（魔物と戦う場合はそのまま頭など急所を狙う）使い手には何より単純に臂力りよりよく、つまり力強さと併せて狙う場所の正確さが求められる。

今のミシルの動きはどう見ても少女の持つ武器らしき銀色の杖？を破壊しようと剣技を繰り出しているようにしか見えない。

また、バスタードソードは別名ソードブレイカーとも呼ばれ、並みの剣、例えばレヴィアスの騎士が使う片手で扱える程度の刃が真っ直ぐな刃渡り60〜70？ぐらいのブロードソード、よりも刃渡りは倍以上の長さがあり厚みや質量も数倍あって、かなり頑丈に作られている。

それを考えると、あのように武器を狙った大剣による剛剣技の息も

吐かせぬ連続攻撃など常人や普通の武器なら数回受けるだけでも不可能に思える。

だが・・・

（（（

ミシエール・オルレアン（現在はミシル・タイナと名乗っている）は、忘れもしないその少女の顔を見た瞬間少女に斬りかかった。

それは、三ヶ月程前に少女が行った所業に対する復讐心という感情も勿論あったが、何より先手を取らなければ以前のようにまた手も足も出ずにやられる、訳も分らないまま得体の知れない妙な術を使われる、という考えが頭にあったからだ。此方が戦いのイニシアチブを取るために頭の片隅ではそういった計算が働いていた。

目の前の少女にこの火の大陸に飛ばされてからこの三ヶ月・・・その間私はアズトの護衛をしたり仕事を手伝いつつ時間を見つけては自分の剣技に磨きをかけるべく王族護衛騎士の時よりも遥かに密度の濃い修練を重ねていた。

それにこの島に入ってから道中、トウヤという少年に人の身体に流れる力、所謂オーラというものの使い方基礎的な手解きを受けた（私が急に喋ったからだろう、トウヤを始め皆一様に驚いていたが、トウヤは私が強さの秘密を教えてほしいと頼むと快く教えてくれた）そのおかげかオーラを使う適性が私にあったのかオーラの基本的な利用方法、つまり身体的強化・装備武器防具強化の術を私は短時間で最低限身につけることができた。

そして、以前の時よりも、早さ・破壊力・頑丈さ、と戦いにおける様々な面で能力が上昇した私がまず狙ったのが厄介にも形を変える銀色の杖らしきものだった。のだが・・・

「くっ。このような細い杖が何故破壊できないっ！」

先ほどから私は少女の杖に何回、いや何十回と大剣を叩き込んでいるが、杖には傷1つついていない。息が切れ手を止めたところ、

「ふふっ。久しぶりの再会の挨拶がこれなんて・・・やはり貴方はいいわね♪それと、この（嘆きの杖）は材質こそただの銀だけど、太古の昔にとある大魔道士が魔術と呪術を組み合わせて作ったものだから、多少以前よりその剣の破壊力が上がったところで破壊はできないわよ？何せ使い手の魔力を吸いにとって、強度を上げるから。まあ、人間には魔力の内包量は分かりづらいでしょうけど」

と言って少女は銀色の杖を此方へ向けた。

「それにこの杖の特性はそれだけじゃなくてね。憶えているかしら？この杖を持ったまま魔法を唱えると・・・フアング」

と、以前見たように杖が凄まじい勢いで長く伸びると同時に丸太のように太くなり此方へ向かってきた。だが、オーラを使えば動体視力なども上がるのか、私は何とかその杖の軌道を見切り直撃を免れた。

「へえ。破壊力だけじゃなくてこの前よりも総合的な能力が上がっているわね。前は為す術もなく当たった（フアング）を避けるなんてね。見逃した甲斐があるってものだわ」

私が素早く攻撃を避けるのを見た少女が感心したようにそう言った。だが、

「見逃しただと・・・？」  
ふざけるなっ！私は貴様だけは絶対に許さないと誓った・・・！失われた国のために！摘まれた尊い命のために！私自身の尊厳のためにっ！」

・・・と言ったものの、理屈はよく分らないがあの杖を破壊するのはおそらく私の力では無理だろう。だが、得体の知れない妙な術、魔法とか言ったあれを使われる前に決着をつけねば・・・この少女は自分の手で倒さねば・・・  
そう決心した私は、

「・・・行くぞ」

「どうぞ」

「セアアッ！」

少女へ必殺の連続突きを繰り出した。

「また、その技？そこは進歩がない、くっ」

呆れたように言っていたが私の突きが少女の右肩を捉えていた。以前三連突きをしたときは全ていなされたが、早さが上昇している今の私の突きはあるときより遥かに早く強力で、さらにもう1突き軌道を変えた突きを加えた四連突きのため、何とか当てることができた。

「・・・油断をしたつもりはないのだけれど。貴方本当に強くなっ

たわね。もう少し高みに昇れば、この子に匹敵するのではないかしら？」

少女は傍にいる同種族らしき男を見ながらそう言った。その男が、

「デュカ・リーナさま、冗談はお止めください・・・それにそろそろお戯れも止められたほうが。下手に調子に乗せても強さに隔たりがありすぎるため却ってその人間が傷付くかと・・・」

と、少女をたしなめつつ、此方を憐れみの目で見ながら言った。

「なんだと。貴様っ！」

私はその大男に剣を向けた。が、

「そうね。この人間の成長を見るのが楽しくてつい遊んでしまったわ、御免なさい」

「い、いえ。謝られることでは・・・貴女様の考えることですから我等のような若造が及びもつかないことは存じますが・・・」

「まあ、ね。でも、別に私を倒すために強くなって欲しいわけではないから、あながち遊びとは言えないのだけれど。要は確認みたいなもののなの」

「確認、ですか？」

「そう」

勝手なことをつらつらと喋り出したので、

「黙れっ！貴様らの事情など知ったことかっ！」

私は怒鳴り大男に斬りかかろうとした。その時、

「まあ、待てよミシル」

今まで傍観していたトウヤがいつの間にか私の横に立ち話しかけてきた。

〃〃〃

理由も分からないままミシルが急に戦闘を始めたので邪魔をしないように俺はしばらく見ていたが、ミシルの殺気とは裏腹に鬼族の奴らには戦意がないように見えたのでそれが気になった俺はついミシルを止めていた。

「邪魔をするな、トウヤ！私は今からこいつらを斬り捨てるっ！」

「うん、それなんだけどなミシル？こいつらに何か恨みでもあるのか？いや確かに俺もさっき銀色を有無を言わさず斬り捨てたけど、あれはあいつがいきなり此方を攻撃してきたからだぞ」

「恨み・・・と言えば言葉で語りつくせないほどあるが・・・」

そう言いながらミシルは憎悪の目を特に少女のほうへ向けていた。

「へえ。とりあえず何があったか聞かせてもらってもいいか？」

「・・・・・・・・」

「おい」

ミシルが急にそっぽを向き口を閉ざしたので思わず突っ込んだ。  
と、そこへ

「推測だが、多分そいつの因縁はなんとなくわかる」

先ほどまでおれと同じく傍観していたガルディアが口を挟んできた。

「どういうことだ、ガルディア？」

「その男、ミシルとか言ったな。おそらくはウォルス王国出身の騎士だ」

「ガルディアが言っていた1晩で消滅したって国か？」

「そうだ。その生き残りだろう。どういう手段で生き延び今この火の大陸に居るのは知らんがその男の戦いを見る限りでは、間違いない」

「成程な。だとすればミシルがあそこまで激昂しているのはあの少女がウォルス消滅に何らかの形で関わっていたと考えるべきか・・・」

俺が何となく理解したところ、

「・・・違う」

ミシルが呟いた。



「ん？違うって何が違うんだミシル？」

「関わっているどころの話ではない・・・！やつが、やつこそがウォルスを消滅させた張本人だっ！」

と少女を指して言った。

「えっ？そうなのか？でもあんな弱そうなやつがどうやって？」

とミシルの言葉に疑問を覚えた俺は少女を見ながら言った。すると、

「あらあら。弱そうだなんて。久しぶりに言われたわ」

言われた本人が楽しそうに言った。

「いや、鬼族だから何か俺には分からない強さがあるのかもしれないけどな。見た目でいえばあんたの横のかいの方がよっぽど強そうだぞ。それにあの銀色の奴も」

「ええ、まあ見た目はね」

くすくす笑いながら少女はそう言った。そしてふと疑問に思ったのか、

「銀色？」

と聞いてきた。ので、俺は

「ああ。なんか青白い火のようなものを吐くやつだった。いきなり此方を攻撃してきたんで叩き斬ったが。魔物かとも思ったが、血も

でないし金属みたいな皮膚だったし、あれはなんだったんだろうな。赤い石とか妙に綺麗だったけどな」

未だにあれの正体がいまいち分からない俺は、この島のやつならなにか知っているだろうと思いき軽い気持ちで聞いた。すると、

「な、なんだとっ！<sup>プラーナマシ</sup>精気兵を斬っただっ！ばかな・・・あれの材質は鋼と銀の合金だぞ。いや、そんなことよりもイレイザーで消し炭になっていないだと・・・？魔法も使えない脆弱な人間風情がいたいどうやって・・・」

横の鬼族らしき大男が何か驚いてた。というか今さらつと馬鹿にしたよなこいつ？

その発言に軽くムカついた俺は、

「どうやって？知りたいか？・・・こうやってただけだっ！」

オーラを開放し大男と少女にプレッシャーをかけた。

「ぬぐっ！？なんだこれはっ？プラーナ？いや、違う・・・！」

「へえ。魔力じゃないのにこの圧倒的なチカラ・・・彼も可能性があるわね。ううん、それどころか今の所最有力候補ね♪」

大男は苦しげに顔を歪めていたが、少女は平然としむしろ楽しそうでした。

「・・・あんだ、何者なんだ？」

結構全力でプレッシャーをかけているのに少女があまりにも平然としているので思わず聞いた。

「？わたしのことかしら？何者・・・そうね、私の名前はデュカ・リーナ、鬼族よ」

「デュカ・リーナ・・・？何か聞いたことがあるような・・・」

俺は何となく聞き覚えがあるような名前を聞いて首を捻っていたが、そこへ

「小僧、俺が説明してやるよ」

レンジのおっさんが言ってきた。

おっさんは先ほどまで鬼族の大男や少女と色々話をしていたらしく、俺の疑問についての説明や分からない点がいくつかあったが納得できる点もある話をした。

魔神とはな・・・どうりで聞き覚えがあるわけだ。俺はそう言った昔話とかモノガタリは嫌いじゃないのでよく本を読んだりしていたからな。ただ、鬼だの魔神てっきり空想の産物だとばかり思っていたが、俺の目の前に立つ少女を見ると、そんな考えは吹き飛んだ。少女が放つオーラでもない不可思議な空気は魔力といい、その魔力を使い様々な不思議な技を繰り出すことを魔法というらしい。

ただ、さっき見た感じではオーラの使い方と似たような部分もあったが・・・発想が同じなのか？

「でも、また辿り着ける可能性がある人間に出会えたなんて、今日はとてもいい日だわ♪」

少女デュカ・リーナが上機嫌にそう言った。

「どういうことだ？また、とか辿り着ける、とか？」

訳の分からないことを言うので聞いてみると、

「んー。その騎士もそうだし貴方もなのだけれど、要は可能性の

話ね」

ミシルをちらりと見ながら言うが俺はますます分からず、

「可能性？」

「そう。闇の大陸に行ける可能性。」

「闇の大陸？」

「そう。人間がそこに行くためには最低でも、ある程度以上の強さ、もしくは誰かに対する尋常ならざる憎しみや恨み、それが新しいモノを産み出せる程の発想や閃き、等が必要なの。」

「あまり良く分からないんだが・・・」

「まあ、今は別に分からなくてもいいわ。それに、仮にそれらを兼ね備えている人間だろうと辿り着けるとは限らないのだから」

「ふーん？」

分からないながらも何となく納得したような気がした俺は一応相槌を打った。

そこへ

「貴様らの事情など知らんと言った・・・！」

俺達の話にしびれを切らしたのかミシルが再びデュカ・リーナへ剣を突き出した

「まあ、以前から考えると貴方は格段に強くなったわ。それに何より私への憎しみが増加しているのが一番良いところね。楽しいから

このまま貴方の相手をしていたいところね」

デユカ・リーナはミシルの剣を全て避けながらそんなことを言っている。

「でもね、私はまだまだ色々やらなくちゃいけないことがあるの。だから貴方にばかり構ってもいられないのよ」

「私の知ったことかつ！貴様だけはっ！」

ミシルが先ほど見せた4連突きを再び放ったが、今度は全てかわされた。

「くっ！」

「それに自分でも分かっているのでしょうか？今の貴方の剣では決して私を倒すことなどできないと。先ほどより剣速が鈍っているわよ。これもほら」

デユカ・リーナは先ほどミシルが与えた傷を見せながら言った。そして手で傷に触れた途端、深手に見えたその傷がみるみる癒えていく。

「なっ!？」

「ねっ？まだまだ今の貴方程度じゃ私に傷を残すことすら無理ね。もっと戦いの経験を積まないと、闇の騎士には触れることすら出来ないわよ」

「闇の騎士?」  
ダークナイト

「まあ、別に会うかどうかとも分からないけれどね。じゃあ私はそろそろ行かないといけないから・・・ジンくん？」

ミシルの剣を避けつつデュカ・リーナは横の大男に話しかけた。

「ハッ！」

「この場はおまかせしても良いかしら？」

「勿論です。デュカ・リーナさまっ！貴女に言われるのなら人間どもを皆殺しにでもしてみせましょうっ！」

「うん、それは無理だと思うからしばらくの間足止めだけして頂戴」

「・・・はい。承知しました」

最初は意気込んでいた大男がデュカに言われて落ち込んだように項垂れていた。まあ、デュカはともかくあの大男ぐらいなら一閃できるだろう、俺なら。

「さすがに貴方だけじゃ分が悪すぎるだろうから・・・召喚！<sup>サモン</sup>牛鬼！」デュカが杖を地面に向けて叫んだ途端地面が妖しく光り、その光の中に大きな人影が見えた。

「じゃあ、あとはよろしく」

とデュカは言うやいなや姿を消した。

と同時に光も薄れ中の人影もはつきり見えるようになった。

・・・そこには鬼族の大男よりも一回りはさらに大きな身体をした

鬼族みたいな角の生えた牛が立っていた。

## 第17話〈鬼族〉

〃〃〃

ロナン・サタクは火喰い島の中央部に建つ神殿の中にある「回復の間」にて先ほど受けた傷の治療をしていた。そこには、

「いやあ、ロナン殿がここまで手傷を負われるとは・・・昨今の人間の強さというものは儂らが現役の頃よりも遥かに強くなったりますのう」

と、年寄りじみた口調でロナンに話しかける者がいた。

「そうか・・・まあ、いくら複数居たとはいえこの俺がこうまで手こずるとは思わなかったな。それにマト婆程の戦闘経験者がそう言うとはな・・・」

「まあ、儂は戦闘よりもむしろこっちが専門ですがの。直接人間と戦ったことはほとんどないが、それでも現在の4柱の皆と戦えるほどの実力を持った人間など儂の今までの経験でも一回ぐらいしか見たことはないですぞ」

と、先ほどから俺の傷口に自らの手を当て治療魔法による治療を施している。

このマト婆とはマトフ・サトイと言い現在この島で最高齢とされており、現在は2500歳をいくつか越えたところである。



鬼族の寿命は人間の凡そ30〜40倍程度で身体能力は基本的に数倍はあるが、マトフは俺が物心ついた頃見た目がすでに年寄りだった記憶がある。

「まあ、250年程前に訪れたあの一味は別じゃったがの」

そういえば俺はマト婆から強い人間がこの島に来た話を聞いたんだっけな。

「スサノオだったっけか？俺はまだガキだったんで実際見ずに聞いたただけだが・・・」

「そうじゃのう。ロナン殿は当時まだ戦闘もできないぐらい腕白坊主じゃったからの」

「まあ、な。ただ当時の4柱、つまりあんたやガトウに聞いた話じゃそいつらも魔法を使ったらしいじゃねえか？今島に居る奴等も魔法みたいな技を使うが何か関係があるのか？」

俺が先ほどマト婆に説明したのは、魔法らしき術を使う人間の侵入者に手傷を負わされたという話だ。

「ふうむ。断定はできんが、もしかしたらそやつらは（闘神）共の流れを汲む者かもしれんな。同じ国か、はたまたその血筋か・・・」

闘神とは250年前にこの島にやってきたスサノオという人間のことを示す。

何しろ身体能力で劣る筈の人間なのに4柱と互角の戦いをしたという話で、その戦い以降我等鬼族はそいつを畏怖を込めて闘神と呼んでいる。

「だが、それはそれでおかしい話じゃねえか？」

「そうじゃな・・・だから断定はできんのじゃ」

というのも、そのスサノオ共と当時の4柱は結局引き分けに終わった戦い以降、お互いの力を認めあい、また戦力の消耗を避けるため互いの領地への不可侵の契約を結んでいるはずだからだ。

「まあ、儂等にとってはそうでもないが250年という歳月は人間にとっては色々あるのかもしれない・・・代替わりなどがあって契約も無いに等しい状態になっておるのかもしれない」

「ぬうう。何て身勝手な奴等なんだ、人間め！」

「さてさて、ロナン殿。あくまでもそれは推測じゃ。別にそうと決まったわけではないわい」

「だがよ・・・」

傷の治療も終わり俺がマト婆と話していると、（回復の間）に誰かが急ぎ足で入ってきた。そして、

「ロナンッ！貴様！単独行動を取った挙げ句侵入者にやられ逃げ帰っただっ！」

俺に向かって怒鳴った。

「はあ。うるせえな、フェニス。そんなに怒鳴らなくても聞こえるよ。」

こいつはフェニス・カハラという小言の多い爺いだ。歳は2000何十歳ぐらいで見た目はごついおっさんだが、一応4柱の長で取りまとめをやっている。得意な魔法は防御それに結界を張ることだ。戦闘では鉄壁を誇る。

「そんなことよりも、フェニス。侵入者の人間共の目的は神獣だぞ。あんたがしっかり見張ってないと駄目だろうが」

「そんなことよりもだと。貴様は本当に・・・い、いや待て！今何と言った！？神獣だと！？」

俺はめんどくさいながらも答えてやった。

「ああ、どうやって知ったかは知らんが確かにそう言ってたな。最もこの島の何処に居るかとかは知らなそうだったが」

「恐らくですが、神獣を嗅ぎ付けられた原因は不死鳥転生の際の輝きでしょうね」

新たにもう1人（回復の間）に入って来ながらそう言った。

「ノルエル？どういうことだ？」

その人物はノルエル・ハザマといい、鬼族には割合が少ない女性だ（この島の鬼族の総数は約500で男性は約400女性は約100）。また歳は4柱で最も若く150を数年前に過ぎたばかりだ。魔法は土属性を使い強さはそれなりだが、こいつには他の誰にもない能力、プラーナの流れを見ることができるといふ特殊能力がある。

「あの時、つまり不死鳥転生の時に島全体が眩い光に包まれましたよね。この島から一番近い人間の国、火の大陸ですか、あそこからここは50?と離れてないですから人間でもその光は視認が可能だと思われます」

成る程。そういうことか。

「それに、関係ないかも知れませんが・・・」

「ん、まだ何かあるのか、ノルエル?」

「いえ。侵入者が来たと思われる時からしばらくして精気兵の反応が途絶えたのですが・・・」

「なっ! お前まさか精気兵ブラーナマシンが侵入者にやられたとでも言うのか?・・・!  
いや、そうか・・・」

「はい。私もまさかとは思ったのですが、ロナンさんまでその有り様だと・・・」

「確かにな・・・俺が相対したやつとは別のやつだろうが、あいつらと同じぐらいの実力のやつが居るならその可能性は高いな・・・」

精気兵は俺が全力で風の魔法を駆使してようやく倒せるほどの強さだから、俺が苦戦した奴等ぐらいの強さの連中と出会っていたら仮にやられたとしても不思議ではない。フェニスが、

「くっ。ロナンが迂闊なだけかと思えば。そんな腕の立つ侵入者ならいいよ不安になるな。こうなれば、ガトウと合流して此方から先に攻めるか・・・?」

ぶつぶつ呟いていた。  
誰が迂闊だこの爺い。  
だが、

「そうだな。それぐらい強い奴等だった。それかこの神殿に詰めている奴等を最低限神獣の警護に残して一気に此方から攻めるのはどうだ？ 50は居るだろう？」

と提案してみるも、

「いえ、それでは此方が手薄になりすぎます。侵入者は何方向から何人来ているかどれがどれぐらいの強さなのか、今のところ不明ですのでそれは危険かと」

ノルエルに一蹴された。  
だが、どうするべきか。

恐らくまだ侵入者が此処に辿り着くまでは一日ぐらいの猶予はあるだろうから、とりあえずガトウを探して相談すべきか・・・

と、その時部屋に生暖かな風が吹き、

「今の子達は頭が悪いのかしら・・・」

頭に手をやり呆れたような声を出す少女が部屋に立っていた。

〃  
〃  
〃

どう見てもいきなり沸いて出たようにしか見えないその牛面がこの場にいた者を見回しながら唐突に喋りだした。

「まったく、あのお方は・・・何の説明もせずに・・・だが召喚されたということは、つまりいつもの如く視界に入る生物を全て殲滅すればよいだけ、ということか・・・まったく人使い、いや鬼使いの荒い御仁だ・・・」

というより何か愚痴を言っていた。

鬼族の大男が焦ったように、

「いや、待てっ！貴様は多分だがデユカ・リーナさまの仲間だろうっ？先ほどデユカさまが召喚魔法、見たことはないがおそらく召喚魔法で貴様を呼び出したのではないかっ！？それならば私はデユカ様の味方、むしろ家族とも言える存在だっ！此方を敵視するのはやめろっ！」

牛面に言っていた。

牛面は、

「なんだ、貴様は・・・？我は確かにあのお方、デユカ・リーナ様と召喚契約を結んでいるが、基本的には契約を結んだ本人以外は殲滅することになっているのだが・・・」

と、大男をなめまわすように見たあと、

「ふん。だが貴様があのお方に何となく似ているような気がするのも事実。そもそもあのお方が召喚しっぱなしで何の説明もせずに消えたから、訳も分からず言ってみただけだ。まあ、貴様は一応殺さずにおいてやる」

「ぐぐっ。まるで納得はいかないが・・・まあいい。とりあえずこの場に居る私以外を倒せば間違いはないはずだ」

「そうか」

どうでもいいが牛みたいな顔してよく喋るなこいつ。それに召喚魔法？召喚契約？何を言っているかさっぱりだ。ただ1つ分かってるのは、

「つまり俺たちを殺そうというわけだな、牛面。どうやるんだ？魔法ってやつか？それともそのバカでかい斧か？」

俺は牛面の持つ2つの斧を指しながら尋ねた。

「ああん？なんだこの小さいのは。まあ、死ぬ前にどう死ぬか教えてやっても特に差し支えはないが・・・」

牛面が言ったが、大男が

「貴様、油断するなっ！確かにそいつは小さいが恐ろしく強いはずだ・・・何せデュカさまが私より強いと判断したのだから・・・」

自分で言って落ち込んでいた。

それにしてもこいつら小さい小さいって・・・

いや、確かに大男は2m以上はありそうだし牛面はそれよりまだでかいから間違っではないが・・・

「それは貴様が弱いだけではないのか？」

「ぬぐっ！そ、そんなことはない」

「そうか？まあいい。そんなに言うなら本気でやってやるとしよう。  
この二丁板斧にちようはんぷでなっ！」

と牛面が言いながら両手に持っていた斧を此方へ向けた。

俺はそれを見ながら炎斬を抜いた。そして、

「ミシル。あの鬼族のほうは任せていいか？」

ミシルのほうを見て聞くと、

「あ、ああ。それは構わないが・・・奴は一体どこから？いや、あの女のことだ。また得体の知れない術を使ったのだろう」

1人で納得していた。ので、俺は牛面に向き直った。

「よし。行くぞっ、牛面！」

「牛面牛面と、この小さいのは・・・我が名はタウラ・ミノス！鉄てつ島の覇者じま、タウラ・ミノスだっ！」

「鉄島？またよく分からん場所だな・・・とにかく行くぞっ、ミシ



ル！」

「応っ！」

俺はタウラへ、ミシルは大男へと同時に斬りかかった。

〃〃〃

俺はその少女を見た瞬間、2つのことを思った。

1つは鬼族特有の角が生えているものの、見覚えのない顔に何か懐かしい感じがしたこと。

もう1つは自分より明らかに年若いその少女の見た目からは考えられないほど異常に禍々しい雰囲気放たれていること。  
つまり、

「戦う気はしねえな・・・」

俺は呟いていた。他のやつからはよく好戦的だの戦闘狂だの言われる俺ですらそんな気分になった。当然、

「ええ、そうですね・・・ロナンさんの言う通りです・・・」

「ロナンですら、そうか・・・だが、知らない者のはずなのに妙に懐かしい感じがするな・・・」

ノルエルとフェニスも俺と同じ印象を受けたらしくやや気後れしながらそう言った。

「ふむ？ 俺もこの少女は見たことないが・・・何か懐かしい感じが

するのう・・・」

マト婆までもがそう言ったところ、

「ふう。まあ無理もないわね。この姿ですものね・・・？先ほどもこのやり取りをしなかったかしら・・・」

少女が何か呟いていた。

「で、おそらくだけど貴方達が現在この島の4柱とやらね？守護者ではなく」

！！！！

少女がそう言ったときこの場に居る者が全員驚愕した。

さらに少女は、

「ああ、そんなに驚かなくても。何故貴方達が分かったかと言うと、貴方達の魔力量と先ほどジンくんから聞いていた話から判断しただけよ」

「ジンくん？・・・ガトウのことか？」

俺は、率直に疑問をぶつけた。

「ええ、そうね。その子からこの島の現状を色々聞いたの。で、今侵入者と戦っている」と

！こいつ、今ガトウが侵入者と戦っていると言ったのか？

「お、おいあんたっ！今ガトウは侵入者と、」

「ええ、戦っていると思うわ。それにしても・・・はあ。まさか姿が違うだけでこの反応とはね・・・さすがに顔見知りになんな態度を取られると少し落ち込むわね。まだ子供だった子はともかく、」  
とフェニスを見ながら言い、

「まさか貴女までもがね、マトフ？」

マト婆を見ながらそう言った。

「なっ、顔見知りじゃと。儂はお主と会ったことなぞ・・・  
！ま、まさかお主、い、いや貴女はっ！」

日頃マト婆が見せないとても慌てた反応をしていた。そして、

「デユカ・リーナさま・・・？」

と、恐る恐る言った。

「そう♪やっとな分かってくれたのね。久しぶり。フェニスの坊やも久しぶりね」

言われたフェニスは口をあぐりと開けて呆けていた。

「坊や？」

「・・・はっ！あまりの驚愕に我を失っていた。本当にこの者がデユカ・リーナさまなのか、マトフよ？」

「ええ、そうじゃフェニス殿。この方の放つ雰囲気は他の者が持ちようもない。まさしくかつてのデユカ・リーナさまと同じじゃ。じやが・・・」

煮え切らない態度でマト婆が少女を見る。

「どうしてこんな姿かと言うことかしら、マトフ？」

「ああ。そうじゃ。デユカ・リーナさまがこの島を出る際は、今の儂よりもまだ婆さんじゃったはずじゃ。雰囲気こそ同じじゃが、その姿は・・・」

「そうね。あの頃の私の見た目はお婆ちゃんだった。貴女は・・・老けたわね。昔は若く美しく聡明だったのにね・・・」

少女がマト婆を軽く憐れみながらそう言った。

「ぬぐっ！・・・っだが、いったい何があったのじゃ、デユカ・リーナさま？」

マト婆が少女に尋ねると少女は闇の大陸というところで起こった出来事、それに伴い少女の身体に転生して現在の姿になったこと、目的を果たすために神獣に会いに来たことなどをかいつまんで俺達へ説明した。

そして、

「それで、先ほどの貴方達の頭の悪い会話に戻るのだけれど」

俺達の先ほどの会話を聞いていたのかそう言った。

「い、いや頭の悪いと言われましても。ロナンが苦戦するほどの者

なら然るべき対処をするべきだと思い・・・」

フェニスがい訳じみた言い方をしていた。

「いや、だからね？そもそも前提がおかしいの。人間が此処まで侵入してきて神獣まで辿り着くとしましょう。でも、だからなに？」と少女デユカ・リーナが言い放った。

「？」

デユカ・リーナ以外の者は皆一様に首を傾げた。それを見て呆れたように、

「いや、だからね、神獣・・・フェニックスはどんな特性を持っているかってこと。」

デユカ・リーナは言った。フェニックスの特性。そんなものはこの島の者なら誰でも知っている。

まず、決して死なない。1000年に一度ぐらいの割合で肉体が燃えつき滅ぶのだがその燃えつきる際の炎の中から肉体を再生させるためだ。ただし、その際に全魔力を使いきるのか、再生してから一年ぐらいは幼獣の姿で大した能力も魔力もない。そして、別名火喰い鳥ともいい、火を体内に取り込み無尽蔵に魔力へと変換するため、その身体は・・・

「そういうことかっ！」

俺はやっとデユカ・リーナの言わんとすることが分かった。

「つまり、神獣に会っても現状連れ去る手段がないということだ  
っ！」

「そういうこと。成獣なら喋ったり体温を調整できたりするでしょうけど。何せフェニックスの体温は最低でも400℃はあるから、魔法を使えない人間は触ることもできないわよ。まだ、飛べないでしょうしね」

そうだ。フェニスの奴が神獣を見張ったり世話をできるのは奴が防御の魔法を使っているからだ。当たり前のことになりすぎてすっかり忘れていた。

「ただ、例外として水属性の魔法を使える人間がいた場合は分らないけれど。魔力を探知した限りではそんな人間は居なかったわ」「ということは、貴女も他者の魔力を測ることができるのか？」

「ええ。それはともかく。今の神獣の世話役は誰かしら」

と俺に聞いたので、俺はフェニスを示した。  
それを見て少女はフェニスへ、

「じゃあ貴方、私を神獣のところへ案内して頂戴」

と、微笑んで言った。

〃〃〃

俺は先手必勝とばかりに上背の遙かに勝る牛面に斬りかかった、が

ギーン！

「力で劣るなら速さ、とでも考えたか小さいの・・・だが、無駄だっ！」

牛面の持つ巨大な二本の斧によって阻まれた。

「牛面のくせに素早い動きをするもんだ。だがっ！」

俺はさらに高速で何か所か素早く斬りつけた。

その巨体に似合わずそれを全て斧で防ぐとその牛面は、

「ふん。速さだけなら大したものだが、死ねっ！」

今度は俺に両手で二丁の斧を振り回してきた。

ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン、ブオン

うおっ！意外と早いな。そ、それに頭を的確に狙ってくる。俺はその攻撃を全てかわしながら、

「当たらないな。そんな遅い攻撃じゃ！」

此方から斬りつけた。

ブシュッ！

牛面は攻撃に意識を割いていたのか今度は当たったが、浅い・・・！

「チッ！生意気な。思ったよりも早いかな。だが、その程度の小さなカタナではかすり傷ぐらいしかつけられんぞっ」

牛面は言い、俺がつけた傷を意にも解さず二丁の斧を再び振り回した。

威力が足りないのか？

そう思った俺は防御と早さに割いていたオーラを炎斬にも集中させた。

とりあえずはあの斧をぶった斬る！

「ハアッ！」

俺はオーラを纏った炎斬で二丁の斧の切っ先の交差する場所を狙った。

ガギイイン！

「なにっ！」

しかし、手応えはあったものの斧を斬ることはできなかった。牛面が、

「ほう・・・人間風情が大した威力だな。そのカタナの力か？いや、我と拮抗している・・・だと」

「カタナ？カタナってなんだ？」

お互いの武器がくっついて拮抗している状態で、また俺の知らない言葉を話す牛面に俺は聞いた。



「？その細く小さな刃はカタナというのではないのか？ムンっ！」

ググッと二丁の斧を押し付けながら、

「いや、これは剣だが・・・っらあ！」

俺も炎斬を押しつける。

「そうか、まあどちらでもいい。どちらにせよこの二丁板斧にちようはんふほどの業物ではないだろう。何せこれは鉄島一の鍛冶師が鍛えたモノだからなっ！」

と、斧をさらに押しつけてくる。

「そ、その鉄島とはなんだっ？」

俺も押し返す、が

「・・・死に行く者が聞いても意味は無かろう・・・そろそろ終わりにするぞっ！」

牛面がさらに力を込めて押してきた。

俺の炎斬が押しきれられ右手のほうの斧が俺を斬った。

「グアアッ！」

俺は斬られ、倒れた。

否、倒れたと見せかけ牛面の右横に飛び、

「ウオオッ！」

ズバッ！

牛面の右脇腹あたりを斬った。

「グアアアアッ！」

今度は効いたのか、牛面は苦しそうに声を上げた。

「き、貴様我が斧を食らって何故無傷なのだっ？」

そりゃそうだ。

オーラで強化した俺の身体は鉄より固い。鉄島とやらでの大した業物かもしれないが、所詮は鉄の斧で俺には通じない・・・まあ、重たい衝撃は多少あったが、あえて食らって隙を突いたのは成功したな。

「まあ、単純な話だ。お前より俺のほうが強いっていう」

いちいちオーラだの説明がめんどくさいので適当に答えた。

「ぐっ！に、人間風情があ！調子に乗るなあ！」

と、牛面が怒鳴り

「我が本気を出すことになるとは・・・貴様は殺す」  
「その様でか？」

「ふんっ！ハアアア・・・！」

牛面が身体全体に力を込めるようにすると、みるみる身体の色が変わっていく。丁度斧の刃の部分のような色に・・・

「っ！なんだっ？」

俺が驚いたようにそう言うと、

「これが我が秘術っ！（鉄化の術）だっ！こうなれば貴様のカタナなど通さんぞ、人間っ！」

だからカタナってなんだ？と思いながら、俺は手近にあった石を拾って牛面の胴めがけて投げた。

キン！

まるで金属のような音がした。

「フハハハ！分かったか人間！我が身体は鉄の硬度を誇る！（鉄牛鬼）の異名は伊達ではないのだっ！」

牛面が自慢げに何か言っていた。いや、お前の攻撃も俺には通じないんだが・・・

「はぁ」

俺は嘆息し溜め息を吐いた。

「ぬっ？どうした小さな人間、私の秘術に絶望したかっ？」

フハハ、と何が嬉しいのかそんなことを言っていた。

「いや、な。さっきの女が相手ならまだまだ面白そうだったな、と思っただけだ」

牛面との戦いが思ったよりつまらないと感じた俺はそう言いながら、大気中のプラーナを炎斬に集中させ始めた。

「ぬっ、デユカ・リーナさまのことかっ!? フ、フハハハッ! 貴様ごときがあのお方の相手になるとでも?・・・言いたくはないが、あのお方は我よりも遥かに強いぞ!」

プラーナを炎斬に取り入れた俺は、

「そうか、楽しみなな」と言い、

「楽しみだどっ? 貴様は我に今から、ズシャッ!」

高速で一気に間合いを詰め炎斬を横薙ぎに牛面の胴へ斬りかかった。

「あ・・・?」

胴から真っ二つになった牛面が空を見上げた状態で驚いていた。

「今から、何だ？斬られる・・・か？」

「ガフツ！ば、バカなっ！鉄の・・・硬度を誇る我が・・・身体があっ！」

と、言いながら牛面の身体が光に包まれ、そして消えた・・・

「？鬼って死んだら消えるのか？そもそもあいつは何だったんだ？鬼？牛？」

考えてもよく分からなかった。

それにしても、（カタナ）とは一体何だ？牛面が言っていたように炎斬は剣ではなくカタナなのか？

ミシルの剣と炎斬を見比べて見ると、確かに炎斬は細く短いし形もミシルのは両刃なのに対して、炎斬は片刃で反りがあるが・・・

と、ミシルは大丈夫か？と思いだして少し離れた場所で戦っているミシルを見ると、

鎧が所々破損しながらも何とか立っているミシルと、いつの間に手にしたのか透明な槍らしき武器と盾を持った無傷の鬼族の大男が向かい会っていた。

## 第17話く鬼族く（後書き）

何となく話のきりが良いっぽい箇所で切りました。

## 第18話　火ノ鳥

〃〃〃

ミシル・タイナは傷ついた身体で考えていた。

復讐すべき相手によりやく巡り合えたと思いきやその存在が突然消え、別の者と相対することになり、どうにもやり場のない感情があったことは認めるが、決して油断したわけではない。なのに鬼族の魔法というものがよもやここまで得体の知れないものだとは思っていなかった。

「どうした、人間よ？ 来ないのか？ 先ほどデュカ・リーナ様に向かった気迫はどうした？」

目の前の鬼族の大男、ジン・ガトウと名乗った者が全身傷だらけになった私へ嘲笑を含ませて言った。

何故私がここまで苦戦しているのか？

私が復讐すべき少女、デュカ・リーナというのだろう彼奴は確かに一見何の変哲もない少女に見えたが、実態はその恐るべき残虐性とこちらの想像もつかない手段で祖国を滅ぼしたほどの実力の持ち主だ。先ほども以前よりかなり腕を上げた筈の自分が軽くあしらわれたのだから・・・

だが、今私の目の前に居るジン・ガトウという鬼族の男はデュカ・リーナよりも明らかに格下に見える。そのような相手に私がここまです苦戦しているのは・・・

「アイスダガー  
氷刃！」

ジン・ガトウがそう叫ぶとどこからともなく無数の透明な小さな短剣がかなりの速さで此方へ飛んできた。

「くっ！がつ！」

少なくとも数十本はあるその飛んできた短剣を剣で薙ぎ払い避けたがそれでも避けきれず二本ほどくらってしまった。先ほどから奴に突撃しようと近づくもこのように得体の知れない術を使ってくる。一度は奇襲で我が剣の間合いへ近づき斬りつけたが、

「ふん。まあ私の氷魔法の前には無駄か・・・それに私に近づけたとしても先ほどのようにこの、氷盾は抜けられないがなあっ！」

奴が左手に持つ透明な盾に受け止められた。

「貴様だけにあまり時間はかけられんな。行けっ！氷槍！」  
アイスジャベリン

言うと同時に奴が右手持っていた透明な槍を此方へ投擲してきた。私はそれをなんとか弾いた、が

「終わりだ、人間！氷剣！」  
アイスブランド

いつの間にか、ジン・ガトウが私の懷に飛び込みどこから取り出したのか透明な剣を私に向かって振りおろしていた。

〃〃〃

「へえ。無邪気なものね」



横の少女が気持ち良さそうに眠る目の前の幼い鳥の姿の神獣を見て  
そう呟いた。

私は一週間前から防御魔法を使いつつこの幼獣の世話をしてきたが・  
・

「熱くはないのですか、デユカ・リーナさま？」

私は、防御魔法を使っているので数百度を超えているであろうこの  
中央の間でも別に平気なのだが、

「ええ、大丈夫よ。ありがとうフェニス」

と言われた。まあ、このお方は今までにそれこそ何回もフェニックス  
の転生に立ち会ってきたのだから、要らぬ心配だったとは思いますが・  
・

「それにしても・・・」

「?なんででしょう?」

デユカ・リーナさまが此方を見て言うので尋ねると、

「貴方も年を取ったわね・・・昔はババ、ババと甘えてきて可愛か  
ったのだけれど・・・」

「ブッ! いつの話ですかっ! からかわないでくださいっ! そんな大  
昔の話を持ち出されても・・・」

気恥ずかしいことこの上ない。

「ああ、ごめんなさい。別に貴方がどうこう言うわけじゃなくてね。何時の時代でもアレは変わらないなと思っただけで。別に他意はないわ」

と寝ている神獣を見ながらそう言った。

「はあ。私は幼獣の姿を見るのは初めてなのですが、そういうものですか？」

1000年前や2000年前、フェニックスはこの島ではない場所で転生したという話を聞いたし実際見てもいないので私はそう言った。

「そうね。もちろん成獣も何回か見たことはあるのだけれど、やはりあまり変わらないわね」

「成程。それで、そろそろフェニックスを求めた理由を知りたいのですが・・・」

私がそう切り出すと、

「そうね。貴方はアレを護る義務があるものね。いいわ教えてあげましょう」

と言いながら眠っている神獣へ近づいた。

「ちよっ！お待ちくださいっ！」

私が慌てて追いかけると、デュカ・リーナ様は此方を振りむいて言った。

「要はね、私が犯した失敗を取り戻すための」

「失敗・・・ですか？」

「そう、私はこう見えて100歳を超えているのよ・・・この身体でね」

それを聞いて私は疑問に思った。闇の魔法による転生の魔法というものがどういったものか詳しくは分からないが、通常鬼族というものは齡50を超えたあたりで成人の身体となる（知能、知識は個人差があるが）なので鬼族の身体ならば100歳を超えていると見た目は少なくとも大人でないとおかしい。

「まあ、緊急事態ではあったの。肉体と同時に魂が消滅させられそうだったというね・・・」

「！デユカ・リーナ様ほどのお方に一体なにが・・・」

「それはともかく、そのせいで最も手近な肉体にしようがなく乗り移ったのよ・・・鬼族でもない人間の肉体にね・・・」

！？

「で、ですがその角は？」

「ああ、これ？おそらく人間の肉体に乗り移った際に私の膨大な魔力に全て元の身体のままだと耐えられなかったのでしょうね。いきなり生えてきたわ。それに肉体も年を取らなくなったしね。ただ・・・」

「それ以上は仰らなくて結構です。人間の肉体、ということを書いて貴女の目的が何となく分かりましたから・・・」

「多分、貴方の考えている通りよ。私の目的は不死の神獣フェニックスの血。人間達が太古の昔より追い求めてやまない火の鳥の・・・不死の秘薬と呼ばれるその血・・・」

そう言うデュカ・リーナ様は寂しそうに笑った。

〃〃〃

ガギンッ！

間一髪だった、か。

俺は今にもミシルの脳天に振り下ろされそうだった大男の透明な剣を何とか受けとめ、押し返した。

「・・・すまない、助かった・・・」

「貴様、何故!？」

ミシル、大男が俺に言った。俺はミシルへ

「いいって。それより変わろうか？こいつのほうが牛面よりは楽しめるそうだ」

と大男を見ながら言った。大男は、

「なっ！やつはっ？」

と、先ほどまで俺達が戦っていた場所を見たが、

「居ないだど・・・？」

「ああ、胴斬りで真っ二つにしたら光って消えたぞ？お前ら鬼族は死ぬと消えるものなのか？」

「そんなわけがあるかつ！・・・おそらくは、召喚魔法の特徴か・・・やつめ、さんざん偉そうに言ってる様か。いや、デュカ・リーナ様への文句になりそうなのでそれは言うまい・・・それよりも、この場をどうするかだ・・・私にこの人間を倒すことができるのか？先ほどの得体の知れないプレッシャーは何だったのだ・・・デュカ・リーナ様も私では足止め程度しかできないようなことを言っていたが・・・いや、いくらあの方とはいえ私の実力を完全に見切っているわけではあるまいが・・・」

大男が何かぶつぶつ言っていた。

独り言を言っているつもりだろうが全部聞こえているぞ。というか独り言多いなこいつ。

「で、どうするミシル？」

「いや、助けてもらって何だがこいつは私にやらせてくれ」

「要らない世話だったか？まあ、多分その剣で防いでただろうけど一応、な。じゃあ、俺は離れて見とくよ」

実際俺が防いだときミシルは剣を構えていたからな。俺が何もしなくても死ぬとは思えなかった。

ただ、それなりに強いと思っていたミシルが追い込まれていたんで少し焦っただけだ。

俺は邪魔をしないよう先ほど戦っていた場所あたりまで下がった。と言っても10mぐらいしか離れてないが。と、ミシルが叫んだ。

「いつまで、ぶつぶつ喋っているっ！行くぞっ、ジン・ガトウ！」

「はっ！奴は何処だっ！」

ジン・ガトウと呼ばれた大男が我に返ったように言った。  
俺を探しているのか？

「貴様の相手は私だっ！他の誰にも邪魔はさせん！」

それを聞いたジン・ガトウは、

「ほう、そうか。ならば今度こそ、貴様を殺してやろう。その後であいつだ」

俺のほうを一瞥して、手にした透明な剣の切っ先をミシルに向けた。  
うん、そういうことはとりあえずミシルを倒してから言え。

「御託はいいっ！今度は貴様を貫くっ！」

ミシルが言うと同時にその身体と剣が淡く光りだした。オーラを剣と身体に集中させている。

俺がついさっき教えたオーラの闘法をもうあれだけ使いこなしているのは、よほど鍛練を積んでいるからだろう。ただ……

さっきまでは使っていなかったのか？それとも、使う気がしないぐらい戦意がなかったのか？

俺はミシルを見ながらそんなことを思っていた。そして、ミシルが剣と全身にオーラを集中させきったのか、

「行くぞっ！」

と、ジン・ガトウと呼ばれた大男に斬りかかろうとした。その時、

島が、揺れた。

くくく

最古にして最強の鬼族と謳われたデユカ・リーナ様が、何故神獣が転生したばかりのこのタイミングで火喰い島に戻って来たのか、その理由がやっと分かった。つまり、

「その人間の身体の寿命が近いのですね？」

私が言うと、デユカ様は

「その通りよ。まあ、もう1つ理由があるのだけれどね・・・」

そのもう1つの理由を聞けばそれは・・・

私ごときではとても力にはなれそうにない話だった・・・

「でも、安心して頂戴。神獣の血をもらったらすぐに出ていくから、

貴方達に迷惑はかけないわ」

そういうと、デユカ様は何処からともなく短剣を取り出した。

「デユカ様、それは？」

「ああ、これ？黒焰竜の牙を加工したダガーよ。衝撃にはそこまで強くはないけど、かなりの熱に耐えられるわ。大陸の鍛冶師にもらったの・・・闇の大陸のね」

と言って神獣に近づいたがそこで神獣が気配に気づいたのか目を覚ました。

「ピエッ!？」

目の前の少女の持つダガーに驚いたのか神獣が驚いたように鳴いた。

「いい子だからじっとしていて頂戴。大丈夫。傷つけた所はすぐに治るから」

デユカ様が神獣を手で捕まえてそう言った。熱くは・・・ないのだろうな・・・

シャッ!

と神獣の身体をデユカ様のダガーが一閃し、神獣の身体から血が流れた。

「ピエエエッ!！」

不死の身体とはいえ痛みはあるのだろう。神獣が大きな声で鳴き出



した。

「ごめんなさいね。でも、」

と、言いながらデユカ様が神獣の身体から流れる血を掬って、

「貴方の血が私には必要なの」

と、その血を口に含んだ。

「あら？何ともな・・・ウ、ウアアアアアアッ！」

デユカ・リーナ様が何か言いかけ・・・苦しみだした。  
そして大きな輝きと共に島が揺れた。

~~~~~

なんだったんだ今の揺れは？すぐにおさまったが・・・
聞いた話じゃこの島の奥のほうには火山があるらしいが、今は活動
してないとアズトが言ってたが・・・
火山の揺れじゃないのか？

俺が今の揺れについて考えていると、

「な、この膨大な魔力は・・・そうか！」

ジン・ガトウがミシルとの戦いをそっちのけで門の向こうの方を見
ながら何かに気づいたように驚いていた。

「魔力・・・だと？貴様何を言っている？」

ミシルがそんなジン・ガトウの態度を訝しんで聞いた。

「貴様ら人間には分からないだろうが、私が今感じている魔力は丁度神獣が居るあたりだ・・・」

と、何故か透明な剣を納めた、いや消した・・・？

「ほう・・・それで、何故貴様は剣を納める？」

と俺と同じ疑問を覚えたのかミシルは警戒を解かないままジン・ガトウに尋ねた。

「なに、ここで私が戦う意味が無くなったというだけだ」

と、ミシルから少し距離を取るように離れた。

「戦う意味だと？」

「ああ、危険を冒すのは私の望むところではないからな。貴様ぐらいは殺してもよかったが・・・」

と、ちらりと俺のほうを見て言った。

「忠告しておいてやるが、貴様らはもう島から出たほうがいいぞ？
どうせこの島の神獣は目的のモノとはちがうのだろうか？」

「そうはいかんっ！私はあの女を倒すっ！」

ミシルが言った。

「身の程知らずが・・・自分でも分かっているのだろうか？貴様の剣では決してあのお方に届かないということを」

「ぐっ！それでも・・・仇が居る場所が分かっているとおめおめと引き下がれるかっ！」

「ふう。そこまで言うなら止めはしない・・・どうせ無駄だろうしな。私は引かせてもらおう」

「待てっ！貴様は逃がすかっ！」

「ふっ、さらばだ。吹雪^{ブリーズ}！」

ジン・ガトウが叫ぶと、辺りが急に吹雪に覆われ前が見えなくなつた。

吹雪が晴れるとそこにジン・ガトウの姿はなかった・・・

「くっ！あの女に続きまたしても・・・」

ミシルが悔しがっていた。

俺は近づき、

「まあ落ち着けよ、ミシル。とりあえず撃退した、と思えばいいんじゃないか？」

「トウヤ・・・そう・・・だ・・・な」

俺が声をかけた途端ミシルが倒れた。

・・・多分オーラの使いすぎだろう。怪我也多いし、あれは加減が難しいからな。

さっきのオーラ量を考えれば捨て身でオーラを集中させていたのは分かっていた。あの剣が当たればジン・ガトウという大男程度ならおそらく倒せていた筈だが、奴が途中で逃げてよかったのかもな・

・
続けてたらミシルもおそらく無事ではすまなかっただろうから・・・

「それにしても、魔力・・・か」

さっきジン・ガトウが見ていた方向を見ながら俺は呟いた。

島が揺れたあと、ジン・ガトウがそう言ったとき俺もその方向を見てみたが、確かに何となく嫌な禍々しい雰囲気を感じた気がしたが、あれが魔力ってやつか？

だとしたら・・・

「ミシルさんっ！トウヤさんっ！無事ですか！？」

敵が居なくなったと判断したのだろう、俺たちの戦いに巻き込まれないために他の倒れている者やレンジのおっさんを連れて数百m後方の森あたりから様子を窺っていたアズトがこちらに駆け寄りながらそう言った。まあ、多少のとぼっちは傍にネクが居るから大丈夫だったと思うが。

「ああ。いや、俺はともかくミシルはしばらく休憩が必要だろう。オーラを使い果たしているからな」

傷のほうも致命傷じゃなさそうだから、少し寝たら回復するだろう。オーラによる身体強化は治癒力も活性化される。

「そ、そうですか。ではこの辺りで休憩しましょうか」

「そうだな。それでミシルが回復したら・・・」

「ええ。先に進みま」

「他の奴らと合流して島を出よう」

「しょう・・・ええっ!？こ、ここまで来て何故ですかっ?」

「いや、な。一つには目的がほぼ達成されたということだ。当初の目的であるこの島が光った原因つてのは、鬼族の奴の話から判断するとほぼ間違いなく神獣のことだろう。なあおっさん?」

傍に居るレンジのおっさんに話を振ると、

「ああ。小僧の言う通りだ、俺はそう聞いた。神獣フェニックスが居るとな。だからアズト、お前の大元の依頼主にそれを報告しに一度帰り、もし再度くるなら出直すべきだろう。神官を連れて、な」

この目で見ただけではないが本当に神獣フェニックスが居た場合、その扱いに素人である俺達にできることは何もない。神獣、聖獣の類は取扱い注意ってやつだ。それらの扱いを生業とする神官以外のやつが下手なことをすると怪我をするだけじゃなく1つの国を焼き払われる、という逸話まである。

「で、でも神獣はともかく鬼族が実在したということは特殊なモノなどもあるかもしれませんが・・・」

ここまで来たら諦めきれないのかアズトが粘って言う。
俺は、

「確かに何かあるかもしれないけどな。ただ、これ以上進むのは危険が大きすぎる。ここまでは何とか来れたが、これから先はまだ強いやつが出てくるかもしれない。さっきいきなり消えた奴とかな・・・どちらにせよ俺たちは歓迎されてないから、間違いないで襲われるしな。もしこれ以上進むなら神官は別にしてもそれなりの戦力が居ると思うぞ?」

と説得を試みた。

「・・・確かにそうですね。ここまで進めたのもトウヤさんの力に因るところが大きいですね・・・そのトウヤさんにそこまで言われたら・・・」

と、アズトが諦めたように言った。

そして道具袋から出した狼煙を空に向けて上げた。

第18話く火ノ鳥く（後書き）

ご意見ご感想あればお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121y/>

剣盗りモノガタリ

2011年12月2日15時47分発行